
龍の宿命

kumegon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍の宿命

【Nコード】

N4156K

【作者名】

kumegon

【あらすじ】

魔法の才を持って生まれてきた主人公ラルファスは、魔道の本場ナーダ国で、第八魔道師を勤めている。ナーダ国は、世界一の軍事力を誇っているフェース国に狙われていて、ラルファスと同年代の魔道師セシドルはフェース王の真意を聞きに使者になる。

フェース国へ向かう途中、セドリックという昔はすごい魔道師だった人と出会い、一緒にフェース国へ向かうことになる。その道中いろいろながあったが、ついにフェース国の王都、ロンズに着き王と面談するが、それが罫で間一髪で逃げ延びる。

現在第六章突入！

プロローグを新しく作りました。

そして、小説タイトルを『魔道』から『龍の宿命』にかえました。

登場人物紹介

ラルファス・セファリード

ナーダ国第八魔道師。今作の主人公。男性。十七歳。出身はナーダではない。

茶色い髪の毛でショート。顔はかっこよい。目は普通の大きさで深紅の瞳。スリムな体系。黒い服を常時着用。

使える魔法の種類は内力系魔法（体内に影響する魔法。肉体強化）と外力系魔法（体外に影響する魔法。主に攻撃魔法）と外力内力系混合魔法（体外にも体内にも影響する魔法。攻撃、防御どちらでもきる）

魔力、技術ともに魔道師トップレベルだが、経験は乏しい。

フレイヤ・レイド・ナーダ

ナーダ国女王。今作の主人公。女性。外見が十九歳前後に見えるが、自らの魔法で老化を防止しているため実際のところはわからない。

金髪で長い髪の毛を持つ。顔はどの角度から見ても欠点が見つからない。かわいいというよりは美人。目は若干細く、碧眼。華美な服装は一切しないで常時戦えるような服装。

使える魔法はほとんど。

魔力、技術、経験、すべてにおいて魔道師をはるかに凌駕している。

レスター・ファモン・ナーダ

ナーダ国第一魔道師。ナーダ国三王家の一つ、ファモン家の現当主にして、女王フレイヤの祖父。百歳はゆうに超えてはいるが、今もなお現役魔道師だ。引退する気はさらさらなく、死ぬまで続けるらしい。

使える魔法の種類は主に外力系魔法（体外に影響する魔法。主に攻撃魔法）。

魔力は魔道師平均レベルだが、経験、技術ともにほかの魔道師たちをはるかに凌駕している。冷静さもかねそろえている。

セイル・ハーヴィー

ナーダ国第二魔道師ナーダ国出身の魔道師。四十二歳の無精ひげをはやしているおじさん。髪の毛は黒で短い。黒いマントを着用。体格は良いわりには繊細な心を持つ。普段は敵の偵察を仕事とする。戦場へはあまり出向かない。ナーダ国の情報網はほとんど彼のものだ。

使える魔法の種類は内力系魔法（体内に影響する魔法。主に肉体強化）と外力系特殊魔法（体外に影響する魔法。外力系魔法とは一風違う）。

魔力、技術は魔道師トップレベルだが経験は乏しい。

エド・ジュリアード

格闘国家ガリオス出身の魔道師。第三魔道師。二十一歳で精悍な顔立ちの青年。目は細く瞳は黒い。髪の毛は黒くいつもはねている。いつもサングラスを着用。

使える魔法の種類は内力系魔法、内力系変化魔法、外力系魔法、外力内力系混合魔法の四種類と豊富。

魔力、技術、肉体力は魔道師屈指の実力を持つ。その反面若いがゆえに経験は少ない。

女性のことを『ちゃん』付けていう癖がある。女王フレイヤにたいていしても変わらない。

ミウ・フェーマス

ナーダ国出身の魔道師。第四魔道師。十五歳でやさしそうな顔立ちをしている少女。顔には、まだ幼い面影を残している。髪の毛は

金髪でショートヘア。目はぱっちりとしていて瞳の色は黒。身長は百五十センチと普通。

わずか七歳でナーダ国の魔道師となった。これは最年少記録らしい。

使える魔法の種類は外力系魔法、召喚魔法でナーダ国唯一の召喚魔道師。

魔力は魔道師トップレベル。経験と技術は足りない。精神力や集中力は、世界で一、二を争うとさえ言われている。あまりの魔力の多さのため少し制御を甘くすると膨大な量の魔力が放出されてしまいうらしい。

カーヴァン・マドリーヌ

修羅国家レイガ出身の魔道師。第五魔道師。別名、破壊の魔道師。三十八歳で筋肉隆々の背の高い男。厳つい顔をしている。髪の毛は黒く短い。目は細く黒い。体系はぽっちゃり。

好戦者で楽しみは戦のみという戦闘狂。こまごまとした戦いが嫌いで爽快にまとめて消すことが好き。人生の目的は強くなること。強くなるためにはどんなこともやってのける。

使える魔法の種類は内力系魔法、外力系魔法、外力系変化魔法、外力内力系混合魔法。

魔力、技術は魔道師トップレベル。しかし、性格が性格なので国内では使われないため、出番はあまりなく経験は少ない。

セシドル・ジュリアード

格闘国家ガリオス出身の魔道師。第七魔道師。十八歳で精悍な顔立ちの青年。目は細く瞳は黒い。黒い服を常時着用。

使える魔法の種類は内力系魔法、内力系変化魔法、外力系魔法、外力内力系混合魔法の四種類。他にも力は隠しているらしい。

魔力は魔道師トップレベルだが、技術、経験に乏しい。カイン曰く、セシドルは天才らしい。

登場人物紹介（後書き）

今後も更新していきたいと思えます。

世界観てきなもの

一国の支配者が求めた力は、一万の兵士でも、百の魔物でもなく魔道師だった。

魔法の才を持つものは万に一人といわれている。その中から『魔法使い』にまで成長するものはそのごく一部だ。しかし、まれに圧倒的な才を持って生まれてくるものがある。屈強な兵士一万人を相手にしても勝てるほどの魔力を持つもの……そのものことを人々はみな『魔道師』と呼ぶ。

国々の王達はみな恐怖と嫌悪感を持ちながらも魔道師たちを飼っていた。他国に劣らぬように……それゆえ、多くの魔道師を探していた。

第一部『ジャスティス、侵攻す』プロローグ

黒衣の男が飛空艇の船首で遠くを見つめていた。

男は青年と少年の中間くらい年齢しか見えないが、冷たい表情がそれは違ふということ物語っている。

その男の視線の先には、これから戦いになるであろう都だったが、だが、それは男にしか視認できていない。ほかの者は、のんびりとくつろいでいる。

その都は、この国の王都だ。

そして、彼の望む物はその都の中に嚴重に監視された部屋に保管されている。

たとえ、ネズミが通ろうとしても無理だろう。すぐ見張りの兵に見つかるか、その物自体の能力で跳ね返されるか、どちらかだ。

普通の者なら、決して戦う気持ちが湧いてくることのないほどの平和な都だったが、男にはそんな気持ちなど微塵も感じない。

ふと、気配を感じ、後方を向く。その気配は殺気ではなく、むしろ穏やかな気配だ。

「団長！ 見えてきました」
どうやら黒衣の男以外にも、視認可能な位置に近づいてきたらしい。

「ああ、わかつている。今回も一気に叩き潰すぞ」
背筋が冷たくなるような声だった。

それに答えたかのように、しっかりとかされた銀髪が風になびく。

都は目前だ。

民衆たちは異変に気づいて大騒ぎだろう。

いや、この都……国に限っては、それはないのかもしれない。

雷鳴のような轟音が、あたりを振動させる。
この音は、反対側の位置でも聞こえただろう。
刹那一秒後、都に入るための門が破壊される。

そして侵入。

飛空艇が開発されてからまだ間もないため、上空からの攻撃には対策はうってないらしい。

民衆は慌てかえって、我先にと逃げ惑う。

しかし、民衆などには気にも触れない。

向かう先は、都のド真ん中にある城だ。

城門の上から、弓矢が放たれる。

最初は勢いのあつた矢は、だんだん減速していき、しまいには風にあおられて落ちていった。

それを見届けてから男は言う。

「総攻撃だ」

それが、男にとっての戦いの始まりだ。

言い終わるや否や、男は飛空艇から飛び降りたのだ。

自殺行為だ。

もちろん、当の本人はそんな思いでやったわけではない。

常人ならば、親が見ても確認すらとれないほど潰れるくらいの高さだが、男は違った。

上空で両手を広げてバランスをとる。

そのまま、地面まで落ちていく。

そして、両足で着地。

人間業ではなかった。

一体その細い足に、どれほどの筋力を宿しているのか

疑問に思うほどだった。

しかし、男はそれで終わらない。

着地したかと思えば、今度は走る。

残像が男の後を追うように連なっている。

目にも止まらぬ速さだ。

一瞬で場内に侵入する。

場内では、飛空艇を止めようとして兵たちが城から出ようとする。

そのため、男とはちようどすれ違いになるのだ。

その兵たちと男がすれ違った際に、鮮血が舞った。

男は気づかぬうちに剣を抜いていたのだ。

その剣は、魔剣とよばれる類の武器で、チャージされた魔法によって性能が変わる。

そして、彼の剣は黒いオーラを放っており、ブウウウウンという音を立てている。

兵たちは、不気味な黒い軌跡と眼前にいたはずの仲間がいきなり死んで、さぞ恐ろしくなっただろう。

しかし、そんなことを思う前に首筋が冷たくなる。

死神が生物を殺すように男は無慈悲だった。

次の瞬間、その兵も仲間同様、血の海に沈んでいく。

王室につくまで、それほど時間は要さなかった。

王室に入ると、真ん中の玉座に冠をかぶった男がすわっていた。

この男こそが、この国の王だ。

「貴様、フェース国のジャステイスの者か！」

顔はビシツとしていたが、心の中では恐ろしかったに違いない。

その証拠に、王の声が震えていた。

男は凄然と答える。

「……わかっているのなら話が早い。我々が来た目的もわかってい

るだろう?」

王の表情が崩れた。

奥で見え隠れしていたものが見えた。

「……貴様らには断じて渡さんぞ!」

「ふん、勝手にほざいてる。やるうと思えば、この城を消し去ることなど赤子の手をひねるも同様なんだぞ?」

その瞬間、濃厚な二つの殺気が放出された。

最初から、その存在には気がついていなかったが、害を加えないのであれば何もする気はない。

しかし、これは見過ごすわけにはいかない。

「その隠れている二人、出て来い。俺が気づいてないとも思っただか?」

不意に風が吹く。

そして、二人の男が王を庇うように男の前へ現れた。

「陛下、お逃げください。ここは私たちにお任せください」
年をとっている男のほうと言う。

しかし、王は言う。

「何を言っているか! 余も戦うぞ」

そう言って王は立ち上がる。

「陛下がそう言うのであれば……ジーン、お前は陛下をお守りしている」

「わかりました」

若い男が言う。

そして、老けた男は向き直る。

「ファモール国第一魔道師ガハルド・セファリードがお相手する」

「……いいだろう。受けてたつ」

戦いが始まった。

ガハルドという男は鞘から魔剣を抜く。

光り輝く蒼剣だ。

ガハルドの剣は放物線を描いて、男の胸に切りかかる。閃光が走った。

まるで動いてなかった男は、一瞬で魔剣を目の前に持ち上げ、ガハルドの攻撃を防ぐ。

黒い軌跡が魔剣に収束する前に、男は動いた。切り結んだ剣と剣を強引に押し返す。

ガハルドはよろめく。

男は無造作に魔剣を薙ぐ。

ガハルドは手を返して、剣先の軌道を変える。

ギイイイイイン

澄んだ金属音が響く。

剣と剣が切り結ばれた。

しかし、それもほんの束の間だ。

ガハルドがほんの少し剣の力を緩める。

当然のごとく、男の体は前に持ってこられる。

しかし、男は冷静だ。

ガハルドが男に向かって切りかかろうとする。

男にとって、ガハルドの攻撃は読めていた。

蒼い軌跡は男を真つ二つにしようとする。

その前に男は両手を地面につけて、飛び跳ねた。

ガハルドにとって予想外の出来事だったに違いない。

そして、男は数回転して空中で静止

ガハルドは呆気にとられていた。

それを見届ける前に男は次の行動に移す。

男の周りからいくつもの黒い球体が現れる。

その黒い球体には魔力が凝縮されていた。

その一つでもあたれば、ガハルドは死ぬだろう。

だが、かわせばこの城は吹っ飛ぶ。

さあ、どうする？

ガハルドは禍々しい魔力を感じ、こちらを見る。

しかし、時はすでに遅し。

すでに球体は放たれている。

その瞬間、ガハルドの魔力が上がった。

「ホーリー・ブラスト！」

名前には意味がないことはわかっている。

聖風という名前でもいい。

しかし、名前を言うことに意味がある。

それだけで魔法は強力になる。

一陣の風が吹く。

その風と球体が衝突する。

信じられないことに、球体と風は調和する。

完全に調和し、何一つ害がない。

ほお、やるな。

男は感心した。

「これほどの魔法を呪文もなしに一瞬で出せるとは……。お前、
— 体……」

男は、それ以上言わせなかった。

エクシードと呼ばれる一種の力を一気に放出させて、気絶させた

のだ。

「では、クリスタル結界石はいただく」

男はそうつぶやいた。

クリスタル残る結界石は一つ。

一番手ごわい相手だ。

第一章『旅立ち』（一）

総勢八人が玉座に座る女性のところに集まっていた。

この女性こそが、ナーダ国を統治している女王フレイヤ・レイド・ナーダだ。長身で金髪で長い髪を持ち、目は細く碧眼だ。どの角度から見ても欠点のない顔でその右に出る美人はいないとまで言われている。世界中の男共が一瞬でとりこになってしまいうに違いない。

しかし、その容姿を裏切るほどの魔力を持つ。ナーダ国の屈強な魔道師全員がかかってきても倒せるほどだ。史上最強の女王の称号すら持つ。女王自体は知らないだろうが。

ちなみに女王自身は十九歳と豪語しているらしいが、自らの魔法で老化を防止しているため実際のところはわからない。

あたりはしんとしている。その沈黙を破ったのは、もちろん女王だ。

「ということは話をまとめるところということかしら？ フェース国がここナーダ国の結界石を奪おうと滅ぼしにくるのは時間の問題だと」

女王の高い声が王室全体に響いていった。

「いえ、そこまでは言っておりませんが……」

それを言うのは無精ひげを生やしたおじさん、ナーダ国第二魔道師セイルだ。普段は陽気な性格でみんなからは好かれている。

しかし、いざ戦いとなると表情が変わり偵察の魔道師と呼ばれるとおり敵の動きを正確に感知する。

そして得た情報を魔道師全員と女王に伝えるという重要な任務を担っている。

女王はセイルの言ったことを無視して続ける。表情が変わった。

「クリスタル結界石を奪う？ 大いに結構。ナーダを滅ぼす？ 大いに結構。私たちを倒そうなんて上等じゃないの。私たちはそこらへんのへっぽこと同じではないと知らしめてやるいいチャンスよ」

そこらへんのへっぽこ……

最近第八魔道師になったばかりのラルファスはこの言葉に少し引っかけた。

近隣の国の魔道師を今、目の前にいる女王はそういったのだ。

確かに陛下の力は認めよう。

しかし、ほかはどうだろうか？

まだ力を見ていないラルファスはそう思った。

まあ、陛下の言っていることだからそうなのだろう。

「戦よ」

女王は簡単にその言葉をほのめかす。

その瞬間、空気が固まった。

簡単に戦なんかはじめられるものか？

ラルファスはそう思った。

「陛下の戦好きには困ったものですな。ここはまず使者を送り話し合いをするのが一番ではありませんか？」

沈黙を破ったのはすでに百歳は超えようかという老人、ナーダ国

第一魔道師レスターだ。冷静で戦略的なところが売りでナーダの魔道師唯一の三王家出身だ。そのため、フレイヤが最も信頼しているのはこの老魔道師だ。

隣にいるやさしそうな女性、ナーダ国第四魔道師ミウもうなずいている。

しかし

「俺は陛下に賛成だ！ 戦ほど俺を癒してくれるものはないぜ」

大声を張り上げて言うのは筋肉隆々のごつい男、ナーダ国第五魔道師カーヴァンだ。カーヴァンは戦闘狂で有名だ。『破壊の魔道師』と呼ばれている。

この男から殺気としか言い表せられないものが体からにじみ出ている。

「うーん、困ったわね」

女王フレイヤは、つやのある金髪を片手でかきながら言う。

「面倒くさいから、多数決でお願い」

両手を合わせ、かわいらしく片目をつぶりながら言う。

しかし、効果があったのは一人のみだった。

女性に弱い二十歳前半の精悍な顔立ちの青年、ナーダ国第三魔道師エド。この男の口元が緩み、精悍な青年からにやけ顔の青年に変わった。

エド……通称『にやけ顔』は「フレイヤちゃん、いいこと言う〜」やら「フレイヤちゃん、こっち向いて〜」やらフレイヤが女王ということを忘れて色々なことを言う。

しかし、当の本人は完全に無視。

手馴れているな、とラルファスは感じた。

女王の命令は絶対だ。みな、しぶしぶと受け入れた。

「では、戦いたい人〜」

フレイヤが威勢良く言う。手を上げたのは二人。あの戦闘狂と『にやけ顔』だ。

フレイヤは「ふ〜ん」と呟きを入れる。

「もう必要ないけど、じゃあ話し合いしたい人〜」

残りの五人が手を上げる。

「これで決まりね」

フレイヤは言った刹那、大きなあくびをして当たり前のように扉のほうへ向かって行った。

「へ、陛下。お待ちを」

第二魔道師セイルがフレイヤをとめた。

フレイヤは振り返り「まだなにかあるの〜？」と聞いてきた。

「あの、まだ使者に使わせるものを決めていませんが」

セイルが言うとフレイヤは、ふふつと笑いこぼした。

「それをわたしに決めると？ わたし、こつこつの苦手なのよね〜。

あとはあなたたちに任しいんだけど……？」

それにいち早く反応したのは言うまでもなくあの『にやけ顔』だ。

「フレイヤちゃんは疲れているんだよ、きつと。後は俺たちだけで

やればいいじゃないか？ ねえフレイヤちゃん」

「たまにはいいこと言うわね、エド。そう、そのとおりなのよ。わ

たし、今疲れているの。後はあなたたちで決めて」

そう言うと女王フレイヤは消えた。

内力系魔法、疾敏。

脚力を大幅に強化し、高速移動を可能とする魔法。

これにより、フレイヤは王室から消えた。

「全く、面倒なことばかりいつも俺たちにおしつけてよう、あの女王様は」

第五魔道師カーヴァンは『女王様』を強調して言った。

「まあ、仕方がないよ。陛下はああいう人だから」

第四魔道師ミウが答える。

第一章『旅立ち』（二）

「よし、手っ取り早く決めて終わらせようぜ」
カーヴァンが言う。

「俺の考えを聞いてくれ」

そう言ったのはエドだ。エドは女たらしではあるが頭はそうとう切れるらしい。

ほかの仲間たちが同意した。

「まず、レスターの旦那は、ここにおおいとかなければだめだろう。やっぱり若者のように動けるってわけじゃないからな。それに三王家の中の一つ、ファモン家の現当主でもあるからな。死なせてしまつたらそれはそれでやばいだろ？」

次にセイルの旦那。セイルの旦那は偵察したりするのは得意だ。しかし攻撃魔法を習得していない。我が国の情報網が途絶えてしまつてはやばいからだめだ。

その次は、この俺だ。俺は最近少し不調だからやめとして、ミウちゃんは絶対だめだ。レディーにこんな危険な仕事をさせるなんてもつてのほかだ。

その次は、カーヴァンの旦那だ。カーヴァンの旦那は、こんなちまちました仕事はいやに決まっているからだめ。

そして、カインの旦那。カインの旦那は、ナーダ国最強の魔道師だから、ここに何かが起こつてしまつたら、いてもらわなきゃ困る。まあフレイヤちゃんがいるからどうにかなると思うけど。

そして、この若造。この若造はまだまだ未熟者だからだめだな」
エドがそういうなかで、それに反応するものがいた。ナーダ国第七魔道師セシドル。エドが若造といていたものの事だ。

「兄さん、俺がなぜ未熟者なんだ？ しかも俺は若造じゃない」
セシドルは、兄エドに反抗する。
このセシドルという男とエドは兄弟なのだ。よく見ると、それがよくわかる。精悍な顔立ち、スリムな体系、黒い髪の毛……観察を続けると延々と見つけられる。

「まあまあ。エドさんの話を最後まで聞いてあげましょう」
ミウは言う。

ほどなくして、エドに反抗するのをやめた。

「いいか？ では続きだ。といつても残り最後だな。最後はラルフアスだな。ラルフアスは、まだ魔道師なりたてだ。俺たちはお前の実力を知らない。それに、まだお前はフレイヤちゃんの信頼を勝ち取ってない。フレイヤちゃんの信頼がなかったら、この先つらいぞ？ それはおいといて。だからこそ、俺はお前が使者に適任だと思う。みんなはどう思う？」

ほかの仲間たちもうなずく。賛同しているということだ。
しかし、一人だけ賛同していない者がいた。それはもちろんエドの弟であるセシドルだ。

「兄さん、俺、やっぱりわかんねえよ。なぜ俺が未熟者なんだ？ いったいどこが未熟者なんだ？」

「うん。そうだな。俺こつこの苦手だから、カインのだんな教えてやってくれ」

エドはあくびをしながら言った。それをみたセシドルはエドをにらんでいた。しかし、当の本人は全く気にしていない。

「まず、お前の魔力は一級品だ。とてもよく洗練されている。もしかすると、生まれつきなのかもしれないが。次に、経験と技術だ。」

それはどちらともまだ甘い。魔道師同士の戦いならば、必ず負けるだろう。まあ、天才性のあるといえは当てはまるんじゃないか？この天才性をさらに磨き上げると恐れられるほどの力を持つかもしれない。新人と一緒に旅をすれば良い物が手に入るんじゃないか？」いつも不機嫌そうな顔をしている、ナーダ国第六魔道師カインはそう答えた。

エドはその答えに何も驚いてはいなかった。むしろ、それを最初から予想していたのかもしれない。

当の本人はいうまでもなく、喜んでいる。顔が紅潮しているところを見ればわかる。

「カインさんも言っているんだ。だから俺も使者としてフェースに行かせてくれ！」

勢い込んでのってきた。

それにエドは押されてしまった。

「まあ、それでもいいんだが。言っとくが俺が決定権を持っているわけではないんだからな。あくまでもフレイヤちゃんに決定権があるんだからな。よし、この二人でいいか」

「またも皆がうなずいているので賛同しているようだ。」

「では、わしがこの次第を伝えに行くとしよう。わしなら陛下の居場所がわかる。これでも陛下の祖父じゃからな」

「そういうと、レスターは静かに部屋を出て行った。」

「もうこれで話すことはないな？ それじゃあ、これにて解散」

「そう言つと一斉に皆が消えた。」

「自室へ戻つたのだろう。」

残ったのは、カインとラルファスのみだ。

『あとで、俺の部屋に來い』

カインはこう告げた。

そして、カインも消えた。

第一章『旅立ち』（三）

会議が終わったラルファスは自室にいる。
ラルファスの部屋は王室から最も遠い位置にある。やはり信頼されていらないから、というのが理由だろう。

ラルファスは今戻ってきたばかりなのだが、休む暇なく自分の剣を持ち出て行った。

向かう先はカイン・ウィニングの部屋だ。

『あとで、俺の部屋に来い』

目をつりあげたような顔で言われた。

怖すぎっ！！

カインの第一印象はこれだった。

魔力も体からにじみ出ている。おまけに殺気も……

内力系魔法、疾敏。

ラルファスは、自らの脚力を大幅に強化する。

次の瞬間、ラルファスは消えた。

§

§

魔法には種類が豊富にある。

一般的の魔法使いならば肉体強化術である内力系魔法と体外に魔力を放出する外力系魔法くらいしか使えない。

しかし、それらをはるかに凌駕している魔道師ならば内力系変化魔法や外力系特殊魔法などの、発展系魔法を使える。内力系魔法、疾敏はおそらく、魔力を持つものならば皆が使える魔法だ。基礎中の基礎なのだ。

§

§

ラルファスはカインの部屋に着いた。ドアをノックする。しかし、中からは何も反応はない。

「第八魔道師のラルファスです。はいりますよ？」

何秒か待っていたが一向に声が聞こえてくる気配はない。仕方なく部屋に入る。

カインの部屋は、お世辞でも華美とはとてもいえないような部屋だった。殺風景すぎる。

しかし、その部屋の中にはカインはいなかった。

どうしようか？

そう思う。

その刹那、頭上から殺気を感じた。この殺気、尋常ではない。

考えるよりも早く、本能に任せ腰から剣を抜き取る。

風切り音をたてずに、ラルファスの正面に出てきたのは紛れもなくカイン本人だ。

意外ではないにしろ、戸惑った。このまま戦いになってしまうと城は崩壊してしまう。

魔道師同士の戦いではそれが普通なのだ。

カインの右手には刀。

刀からは魔力で光っている。

つまり、この刀は魔力で構成されたものなのだ。

しかし、それを作るためには魔力、技術ともに必要だ。

この人は確かに強い。

だから『最強の魔道師』と呼ばれるわけだ。

そんなことを考えているうちに、もう戦いは始まっていた。

ラルファスは、カインと間合いをあげた。

カインは動かない。

カインさんは、僕の実力を見ただけなんだ。

ならば、僕の最大の力を見せてやる。

ラルファスはそう思っていた。

内力外力系混合魔法、雷進。

ラルファスは、雷をおびて切りかかる。

それでもカインは動かない。

カインと接触する、その寸前に剣は止まった。
紙一重のところまで止まった。
火花が散っている。

魔力を高めて視力を強化すると細い糸が剣の行く手を阻んでいた。
鋼糸

この武器は細くかつ頑丈で殺傷力のある糸だ。触れれば皮膚を削る事は朝飯前で、巻きつければ首を飛ばす事すら出来る。

そして、これまた魔力で構成された武器であるため壊れることはない。

使い手しだいでは、まさしく最強の武器となりうるのだ。

「チツ」

思わず声を漏らしてしまう。

「そんなに易々と俺を倒せるとでも思っていたか？ お前は甘すぎる。子供じみた考えだ。俺を倒したいのならもっと本気になれ。言っておくが俺は本気でやるからな」

仕方なくラルファスは間合いをあげた。

だが、カインはその間合いを一気に詰める。

内力系魔法、獅子舞。

カインは、筋力を大幅に上げ、刀を振り下ろす。

それを寸前でかわし、反撃に出ようとする。

しかし、敵はそこにはいなかった。
後ろにいる。

本能でわかる。

ラルファスは剣を背に回してカインの攻撃を受け止める。
手の感覚がなくなった。
しかし、それでも戦う。

ラルファスは跳躍して間をあける。

外力系魔法の合成技、炎衝風。

この魔法は外力系魔法である、炎衝刃と龍旋風を組み合わせた魔法だ。

ラルファスを中心として炎を纏う竜巻は周りのものを巻き込んでいる。火が飛び移っているのにおかまいなしだ。

「ふん、気に食わない。ガキのくせに」

カインはそう言い捨てると刀を目の位置に構えた。

内力系魔法、鬼雷。

空気抵抗を最小限にして突進する。

その速さは疾敏を超える。

カインが編み出した技だと後々ラルファスはわかることになる。

雷鳴のような音を立て自ら竜巻へ向かっていった。

いや、寸前に足を止めて跳躍したようだ。

外力内力系混合魔法、雷衝舞。

カインは、一気にラルファスへ向かって突っ込んでいった。雷を纏って。

両者の攻撃がぶつかる。

その瞬間、城中に振動が鳴り響いた。
一般人でもわかるくらいだ。

刃と刃がぶつかり合う音が部屋中に鳴り響く。

そして

その圧力に耐え切れなかったラルファスの剣はひびが入り、壊れてしまった。

第一章『旅立ち』（四）

「チツ」

ラルファスは思わず声を漏らしてしまった。

そして、後ろへ跳躍。

しかし、せつかく開けた間合いもカインは一瞬でつめてしまう。

武器がないのはつらい。だからといって、魔力で構成する武器を作ることはできない。

今使えるのは、この拳と魔法のみ……

格闘術を使おうとしても鉄拳がないとつらい。仮にあったとしてもエド、セシドル兄弟みたいな専門的に習得したものは雲泥の差だ。

仕方がない、アレをつかうか。

外力系魔法、波砲。

ラルファスは両手を前に出し、強力な振動を放った。

それによりカインは押され、仕方なく後ろへ回避した。

外力系魔法、白光・砲。

手を出し、放った魔法は一直線の太い光線と変化し、カインに向かって進んでいた。

倒すのには十分の量の魔力だ。致死量にまではいかないように少し魔力を抑えたが。

「ふん、絶魔級の魔法か。そっちがその気なら、こちらもそれなりと本気を出せてもらう」

魔道師たちは自らの最大魔法を絶対魔法、あるいは絶魔と呼ぶ。絶魔級の魔法とは絶魔と同じくらいの魔法ということだ。

「またも刀を目の位置まで持っていく。
そして

外力内力系混合魔法、妖叉乱舞。

膨大な量の魔力がいつせいに体外へと放出された。
体に纏っている魔力は怪しげに光っている。
不機嫌そうな顔が一層不機嫌に見える。

カインは太い光線に向かっていった。

次の瞬間、重大な過ちに気がついた。

絶魔は強力な魔法のため、それらの魔法同士のぶつかり合いは甚大な損害、そして死傷者が出てしまう。絶魔ほどではないにしろ、この城には一般人もいる。
そしてこの城は間違いなく倒壊するだろう。

終わった……
そう思った。

しかし、そのようにはならなかった。
突然、二人の魔法の効果が切れた。
飛び移っていた火も消えていた。

そして二人の間には、長身で長い金髪の女性が両者に向かって手を出し立っていた。

「全く、先の考えられない人たちだね。あんたたちのせいで、どれだけの死者が出ると思っているの？ 愚か者。特にカイン、あなたはいつもこごう。まあ仕方ないのかもしれないけど。あなたは強くなるために来たんだからね。でも、こんなところでやる必要性は全くない。今後気をつけなさい。以上よ」

そこに立っていたのは、もちろん女王フレイヤだった。
今はもういない。きっと、疾敏でも使って帰ったのだろう。

しかし、あの魔法を一瞬で粉碎する力はとても人間業とは思えない。
い。

実際、戦ったこともある。

あの力に屈服したのだ。

§

§

さきほどの殺気はすでない。

「ラルファス、お前の実力を良く見させてもらった。お前は魔力と技術面では長けてはいるが、経験不足だな」

カインはさらに続けた。

「だから、お前は俺に負けた」

え？

ラルファスは全くわからなかった。
負けてもいないし、勝ってもいない。あのまま続けていたら負けていたと思うが。

「チェックメイトだ」

そう告げると、いきなり意識がぼやけた。
足元を見ると床が朱色に染まっている。
太ももから血が出ている。
痛みはない。

しかし、血が出ているのだ。

なぜ？

はつきりしない意識で考えても仕方がないのに、つい考えてしま
う。

だが、答えを見つけるよりも先にラルファスは床に倒れる。

冷たい感触がしたとともに深い眠りに落ちた。

「意外とヤワなやつめ」

カインは静かにそう言う。ラルファスを肩に乗せ部屋から出てい
った。

第一章『旅立ち』（五）

むむっ。

ラルファスは目に陽光が差し込み、眠りからさめた。

辺りを見回すと、どうやら治療室らしい。

どうやら、ラルファスはカインとの戦いによって倒れてここに運ばれてベッドに眠らされたらしい。

「起きたか」

横から声が聞こえてくる。

その声の主は、先ほども聞いたことのあるものだった。

「太ももは大丈夫か？」

そう言われて、布団をまくってみると太ももの部分に包帯が巻かれていた。

さっき、なんで僕はここから血が出てたんだ？

あのかきは意識が朦朧としていたので、あまり詳しくは覚えていない。

その疑問をカインにぶつけてみることにした。

「鋼系という武器は知っているか？ マイナーな武器だから知らなくても当然だが」

「知ってます」

「なら、話が早い。あのかき、お前に気づかれないうちに鋼系の一本を太ももに侵入させた。痛みは感じることはない。しかし、お前の気がつかない間に血はどんどん流れ出ていつている。だから、お

前は意識を失った、ということだ」
簡潔で詳しい説明だった。
これで、疑問は解決した。

「あともう一つあるのですが、よろしいですか？」
無言のまま、頷いていた。

「魔力で構成する武器の作り方を伝授してくれませんか？」
その瞬間、カインの細い目がパツと見開いた。
「なぜだ？」

カインは聞く。
その顔の表情は険しい。

「カインさんも見たでしょう。僕の剣が破壊されるのを。あれは圧力に耐え切れなかったというのが原因ですよ。これからさき、魔道師同士の戦いは何度もあるでしょう。そのときにために……」

その先は、カインは言わせてくれなかった。

「ふん、そんな簡単な理由で教えるわけにはいかんな。第一に、そんな簡単に習得できる技ではない、ということ。第二に、今は時間がない、ということ。第三に、危険な技、ということ。そして、第四に、俺は弟子を持たない、ということだ。わかったか？」

カインの言いたいことは、よくわかった。

最後は、これはどうだろうと思ったが……

カインは不意に立ち上がる。

「俺はもう帰る。安静にしてろよ」

そう言って、治療室のドアに向かって歩いていった。

突然止まって、こちらの方を向いてこう言った。

「陛下からの伝言を伝えるのを忘れていた。フェース国へ出発日が

明後日に決まった。俺はしつかり伝えたからな」

そう言って再びドアに向かって歩き出す。

今度は止まることなく出て行った。

第一章『旅立ち』(五)(後書き)

まだまだ続きます

第一章『旅立ち』（六）

ラルファスは朝の日差しを体全体に浴びて目覚めた。

カインとの戦いから二日たった。

今日はフェース国への出立の日だ。

フェース国への使者はラルファスとセシドルだ。

その目的は、フェース国王ナイゼル・フォウ・フェースの真意を確かめるためだ。

窓に近寄り窓を開ける。

心地よい風が流れた。

すぐ下を見ると、なにやら集まっているようだ。

ゴングゴングン！！

激しくドアをたたく音が聞こえる。

「ラルファス様！ もうお時間です。起きてください」

ドアの向こうから、侍女の声が聞こえてくる。

「は、はい！ 今、行きます！」

今頃気づいたのだが、ラルファスはどうやら寝過ごしてしまったらしい。

すぐ、パジャマを脱ぎ戦闘衣に着替える。

戦闘衣といっても、動きやすく防御性に優れた衣服のことだ。

騎士たちが着ている鎧とは全く違う。

そして、昨日新たに作ってもらった剣を持ち窓から飛び降りた。

ラルファスの部屋は、地上から五十メートルほどのところにある。常人が窓から飛び降りるとしたら、それは自殺行為だ。

しかし、ラルファスは魔道師で、魔法によって肉体強化をしてしまえば楽勝だ。

そして、ラルファスにとって肉体強化は息をするのと等しいくらいに簡単だ。

ラルファスはバランスをとりつつ、下降していった。

風がやさしくぶつかっていく。

それが気持ちよかった。

そして、静かに着地。

あまり、目立ちたくはなかったが、いやでも目立ってしまった。

まあ、今日限りは許してもらおう。

そんな安易なことを考えていた。

門の前には一つ上の魔道師、セシドルがラルファスを待っていた。

セシドルとラルファスは、ほとんど同年代と言っても良い。

まだナーダ国に来てから一カ月もたっていないが、これから先セシドルとは良い仲になりそうな気がする。

「遅いな。いったいどうしたんだ？」

「寝坊しちゃった……」

「恥ずかしそうにラルファスは言う。

「顔から火が出そうだった。」

「そうか、仕方ないな。よし、行くとするか」

「そう言って二人は、歩き出す。

「ファンファールが鳴り響く。

「勢いのあるファンファールだ。」

「二人の魔道師はフェース国へと向かっていった。

「長い長い旅路となりそうだ。」

第一章『旅立ち』(六)(後書き)

少し短いような気がします。
すみません

第二章『無人の町での死闘』(一)

夜が明け、ラルファスたちは風の音で目を覚ました。

昨日、ナーダ国の首都ザワールを出て、暗くなるまで高速で移動していたが、遂に町へたどり着きはしなかった。

そのため野宿することになってしまったのである。

ラルファスは両手を上げて背伸びをした。

固まっていた筋肉がほぐれたような気がする。

「よし、食料調達に行きますか」

セシドルはそう言う。

普通、旅するならば食料は持っていくのが普通だ。

しかし、彼らは持っていかなかった。

食料は旅中に調達すればいいからだ。

そして、彼らの食糧調達法は狩りだ。

狩りをすればいつでも新鮮な肉を食べられる。

周りには、草原が広がっている。

辺りには動物はたくさんいる。

しかし、気をつけなければいけないものもある。

それは、魔獣だ。

魔獣といっても飛龍などは死ぬ気で戦えば勝てる。

問題は古龍だ。

古龍に関しては、こんなことが伝わっている。

『古龍が来るところは天災に匹敵するほどの被害を被る。古龍こそが、人類の最大の敵であり、最大の災い。古龍一匹に対し、絶大な魔力を持つ魔人百人がかりで一斉におそいかかろうとも一向に倒れる兆しは現れない。人類はこの怪物に対する対抗手段はないものか』

今現在、古龍は確認されていない。
一部の専門家は絶滅したと知っている。

しかし、絶対の支配者として君臨していた古龍が絶滅するはずがない。

どこかに潜んでいるかもしれない。
もし、戦うことになってしまったら逃げるのが賢明だろう。

これに関しては魔道師の管轄外だ。これこそ、女王フレイヤが相手にすべき敵だ。

ラルファスとセシドルは内力系魔法で視力を強化した。

遠くに体格の良いシカの大群を発見した。
セシドルも見つけたらしい。

二人は顔を見合って頷き合い、そして次の瞬間には残像を残して消えた。

彼らは肉食動物のように、高速で走る。
いや、肉食動物すら超絶している。

あっという間にシカの大群のいる場所に着いた。さきほどまでの視力を強化していないときには視界の隅にあったのに、もう着いてしまった。

シカの大群は不穏な空気を察したのか、警戒している。しかし、それは焼け石に水だ。

ラルファスは自分の剣を抜き一匹のリーダー格の牡鹿に向かって切りかかった。

その瞬間、横でものすごい勢いで通り過ぎて行ったものがいた。間違いなく、セシドルだ。

セシドルは、ラルファスの奥にいる牡鹿を狙っているようだ。

ラルファスの牡鹿は抵抗する余裕すらなく、そのまま倒れていった。そしてセシドルの牡鹿もそうだった。

見えないほどの速さで牡鹿の腹に拳を入れたのだ。これだけあれば、二日は持つだろう。

そう思い、何事もなかったかのように二人は戻っていった。

ラルファスは辺りに落ちているであろう小枝を拾っていた。肉を焼くためには火が必要であり、そしてそのためには燃やすものが必要だ。それが小枝というわけだ。

十分と集まった。

セシドルと合流して、炎をつける。

外力系魔法、火炎。

大きすぎないように手から火を放つ。

その魔法は微々たる物だが、それでも役に立つときには役に立つ。そして、肉を焼く。

焼きあがるまではまだ時間がかかる。

「あの、セシドルさん」

「ラルファス、俺昨日も言ったよな。呼び捨てでいいと」

「はい……それで、セシドル……少しいいですか？」

「ああ、いいよ」

「あの、肉が焼きあがるまでの時間、少し訓練がてらに戦いません？」

セシドルはしばしの間、考えた。

「そうだな。最近、強いやつと戦ったことがないから技の錆を落とすにはちょうどいいかもしれない。よし、やるう」

そう言っつて、セシドルは立ち上がる。

ラルファスも立ち上がる。

セシドルの武器は鉄拳だ。

指に装着するその武器は近距離・肉弾戦でのみ効果が発揮される。

そして、はやさも尋常ではない。

全身が武器といっても過言ではないので、体の一部ではない剣よりもスピードが速いということなのだ。

どう、戦おうか。

それを考えている間に戦いは始まった。

第二章『無人の町での死闘』(二)

先手を打ったのはセシドルのだ。

残像だけを残し、ラルファスのほうへ走ってきた。
内力系魔法、疾敏。

二人の間はそれほど開いていない。
だからこそ、瞬間的に移動されると困るのだ。

しかし、こうすることは予想範囲以内だ。
なにしろ、相手は肉弾戦を得意としているのだから。

一瞬でラルファスの目の前に移動してきたセシドルは勢いのある
アッパーを腹にうちこむ。

ラルファスはそれを、剣で流す。
次は、右からの大きなジャブ、そして左からの頭を狙ったパンチ。
それらも、すんなりとかわす。

しかし、セシドルの攻撃は相変わらず止まらない。
そして、依然として魔法を使おうという気配は見られない。

それだけでもセシドルの運動能力がわかる。

押されたままで終わってたまるか！

外力系魔法、衝風。

ラルファスの魔力が風を生む。

そして、それに押されるようにセシドルは吹き飛ばされた。
外力系魔法、波砲の発展系だ。

これにより生まれた隙をラルファスは見逃さなかった。
その隙を突くかのように猛然と突っ込む。

外力内力系混合魔法、餓狼。

ラルファスの剣は食べ物に飢えた狼のごとく最短距離でセシドルを仕留めようとする。

何者でも吹き飛ばすであろう、その攻撃は確実に相手を仕留める。

金属同士のぶつかり合う金属音のみが虚しく聞こえる。

仕留めそこなった。

セシドルの皮膚は硬化していたのだ。

内力系魔法、鋼燐。

ラルファスは咄嗟に後ろへ跳躍する。着地とともにセシドルに向かう。

別にわざわざ相手の得意な範囲に入るつもりはなかったが、本能的に動いてしまった。

ラルファスの習得している剣術もまた近距離戦を得意としているのだ。

セシドルは、こちらにいつでも対応できるように構えている。不用意には近づけない。

一気に片をつけてしまったほうが良い。

内力系魔法、白光・剣舞。

ラルファスの体が白く輝く。

そして、ラルファスの剣の舞が始まった。

隙を見せることのない完璧な舞いだ。

しかし、セシドルは動かない。

剣先はセシドルを捕らえた。

外力内力系混合魔法、剛力・攻破。

セシドルの蓄えられた力が一瞬のうちに破壊へと導く。

ラルファスは寸でのところで、それに気付く。

しかし、防御は間に合わなかった。

ラルファスの剣舞には隙がなかったはずだ。

それは常人、いや普通の魔道師には見つけるこのできないほんの数千分の一秒の隙だ。

その隙が勝負を左右した。

瞬く間にラルファスは吹っ飛ぶ。

あたる寸前に内力系魔法、鋼燐をつかったおかげで重傷は避けられたようだ。

しかし、後数日は痛みは治まらないだろう。良い運動ではあったが、食欲を失せさせるには十分すぎる痛みだった。

戦いの終わった後のセシドルは倒れているラルファスに手を差しだしてくれた。

セシドルの助けを受け、やっとの思いで立ったラルファスは嫌々ではあったが焚き火のところへ行き、肉を食べたのだった。

そして、朝食をとったラルファスたちは再び疾敏を使って広大な大地を駆け抜けていった。

第二章『無人の町での死闘』(三)

正午、ラルファス一行はある大きな影がぼんやりと見えてきた。視力を強化してみると一つの町だった。

普通の町ならば、夜になると門を閉めてしまうので早くいかないと、また野宿するはめになる。

それだけは逃れたいラルファス一行はさらに魔力を体に流し、マツハの速さで駆け抜けていった。

町へついたのは日暮れ時だった。

そのまちはとても小さな町だった。

しかし、どこにでもある賑やかさは全くなかった。

いや、人の気配すらなかった。

怪しい雰囲気の中、ラルファスたちは進んでいく。町を一周してみても誰にも会うことはなかった。

「なあ、ラルファス。この町、不気味じゃないか？」

たしかに不気味だ。

もう日が暮れたというのにどこの家も明かりが灯っていない。

「少し不気味……」

ラルファスたちが歩いていると背後から気配を感じた。

二人とも、後ろを見るが誰もいない。

「誰かいる……」
セシドルは小声でラルファスに言った。

風向きが変わった。

その瞬間、さきほどまでなかった殺気を感じた。

来る……

案の定、姿の見えない敵は動いた。

全身真っ黒のマントを身に着けた男だった。

敵は両刃の剣を持っていた。

「お前たちも、この町の住人と同じくあの方のエネルギー源となる
が良い」

敵は、そう言いながら斬りつけてきた。

それを飛んでかわす。

そしてラルファスとセシドルはパツと間を開く。

「貴様は何者だ！」

セシドルは聞く。

その気迫は今朝とは比べようにならない。

「我に名はない。我らは皆、影シエイドと呼ばれている」
そう言っ
て敵は上に跳ぶ。

速い。

魔法を使っていないのにあの速さ……

敵は尋常じゃないほど強い。

こちらも跳ぶ。

敵の剣とラルファスの剣がぶつかり合う。
その横からセシドルも入ってくる。

外力内力系混合魔法、剛力・連魔。

セシドルの拳が高速で殴りこむ。

しかし、敵は瞬時に移動してそれをかわす。

セシドルの拳は残像のみ当たり、バランスを崩す。

敵は戦いに相当慣れていているらしい。そして、空中で移動するといふ芸当ができることに驚きを隠せなかった。

ラルファスは着地するまでの短い間に戦法を考えた。

外力系魔法、炎衝刃。

剣身が炎をまとうようになった。

敵は、相変わらず空中にいる。

バランスを崩していたセシドルは、すぐに体制を整え、再び跳ぶ。
ラルファスは逆に地面を駆ける。

内力系変化魔法、猛腕。

セシドルは大きくなった腕を横に回転しながら敵を攻撃する。

外力内力系混合魔法、白光・翔舞。

ラルファスの体が白く輝く。

そして跳ぶ。

地面を駆け抜けると同様の速さで敵に向かう。

敵はセシドルの攻撃を受け止める。

しかし、下からの攻撃には受け止めるすべもない。

敵は吹っ飛ぶ。

致死量とまではいかなくとも後一週間は立てなくなるほどの威力だったはず。

しかし

「ふっはっはっは……それが其の力か。魔道師といえども我を倒せぬのか？」

敵、影は後ろにいた。

しかし、気づくのが遅すぎた。

後ろを向いたときには、黒いマントから飛び出た足が目の前にあった。

反応が遅く、顔面にそれが当たる。

金属特有の冷たさを感じた。

そのときには既に四メートルほど吹っ飛んだ。

「ラルファス！」

顔面からは血が当たり前のように出ている。

くっ。

つめき声すら出ない。

正面にはセシドルの背中があった。

第二章『無人の町での死闘』（四）

「ほお、まだやるのか？」

セシドルは何も告げずに動く。

影の懐に難なく入り込み、右手の裏拳をみぞおちにくらわす。
しかし、セシドルの裏拳は敵の残像を消すのみだった。
敵は正面に移動してきた。

セシドルはそれを読んでいた。今度は左の拳で攻撃。

外力内力系混合魔法、剛力・攻破。

光り輝く拳は敵のみぞおちに吸い込まれていく。
手応えはある。

敵は吹っ飛び、民家が崩壊する音も聞こえた。煙で正面は見えない。
殺すには問題ない力だ。

しかし、その期待は裏切られた。
煙から人影が見えた。

「ふむ。そこそこの力を持っている。そろそろ我も本気を出そう」
辺りから聞こえてきた。声が反響している。
敵の位置を読み取れない。

突然、左斜め後ろから気配を感じた。
本能に身を任せ、内力系魔法で肉体強化した脚力で上に跳ぶ。
煙で視界が阻まれている。

しかし、この一撃で敵をしとめる自身はあつた。
この範囲全体に強力な魔法を放つ、それだけだ。

幸いにも、煙はラルファスのところまではいっていない。
敵は煙の中に身を潜めているのだから、必ずあたるはずだ。

空中でセシドルは静止する。

そして、右拳に全魔力を注ぎ込む。

その白く光り輝く右拳を、次の瞬間振り下ろす。

外力系魔法、『ナーダ魔術の書』奥儀、聖拳・白虎。

巨大な白虎の衝撃波を放つ。この魔法はナーダ魔術における外力系魔法の奥義のひとつである。

巨大な破壊音が辺りに轟く。おまけに煙も取り払ってくれた。

この魔法の残した跡は凄まじいものだった。直径十メートルほどの隕石が落ちてきたのか、というものだった。

さすがに敵は死んだだろう。いや、死ぬ前に消滅してしまっただろう。

敵の気配も完全に消えた。

セシドルはラルファスに近寄る。

顔からは未だに血が流れている。

出血死にはならないだろうが、これから数日の間はまともに動けないだろう。

セシドルはラルファスを担ぎ、町の中心部にあるであろう、宿泊

施設へ向かった。

その後、無人の宿泊施設で一晩を過ごしたのであった。

第三章『風雷の剣聖』（一）

無人の町での戦いから、すでに一週間がたっていた。

ラルファスたちが着ている服がボロボロになっているところを見ると、その旅が大変なものだとよくわかる。

現在、ラルファス一向がいるのは、ナーダ国とフェース国のちよつと中間にある森だ。

この森は、付近の村の住人たちに『魔の森』と呼ばれ、恐れられている。

実際、その森に入ってみると、確かに恐れられるな、と実感できる。

一本一本のき、すべてが空を覆い隠すほど高い。そして、何かしらの魔力もはたらいている。小鳥のさえずりさえも聞こえないほどの静寂さ。

どれひとつとっても、気味が悪い。

しかも、かつて、フェース国の軍隊が、この森に入ると、こつぜんと兵の約四分の三が消えたという話もあるではないか。

ラルファスとセシドルは、無言で歩く。

木が邪魔して疾敏は、使えない。この分でいくと、四、五日はかかると思う。

木をなぎ倒すということも考えたが、それは住人たちの反感を買

うことになるだろう。

たとえば、この森が恐ろしくても、この森には神聖なる者が住んでいるという伝説がある。

人は不思議なもので、神という言葉にひどく執着してしまうという習性がある。この付近の住民たちも、例外ではないのだ。

このときばかりは、この習性さえなければと、嘆いた。

しばらく歩くと大きな泉とであった。

その泉はとても澄んでいた。

しかし普通は、いるであろう魚は一匹たりともいなかった。

今思えばこの森に入ってから、一回も動物を見ていない。

「さつきから思ってたんだけど、この森に入ってから動物に一匹も会っていないよね」

ラルファスはセシドルに聞く。

だいぶ親しくなっているせいか、無意識のうちに年上としての話し方ではなく、友人としての話し方とないている。

「お前も感じていたか。こんなに歩いて一回も会わない……この森は絶対おかしい」

セシドルの体は、いつのまにか隙がなくなっていた。いつ何時、襲われてもいいように……

ラルファスは、泉の水を手ですくって飲みながら、それを聞いていた。

少し休んでから、また歩き始める。

いつのまにか、あたりがいつそう暗くなり、日が暮れる時間となっていた。不気味さもいつそう強まった。

ようやく大きく開けた広場に着くと、今日はそこで泊まることにした。

今回は、運良く食料を持ってきていた。

食料と言っても、普通の食パンだ。それを二人で一枚ずつ食べる。

夜になっても狼の遠吠えすらなく静寂のままだ、

ラルファスたちは、これ以上起きていても意味がないので、明日に備えるという意味でも、早く寝ることにした。

その日は、涼しかったのですぐ寝つけられた。

§

§

深夜、ある異変に気づき、ラルファスはおきる。

横を向くと、セシドルはすでにおきていた。

あくびをして、背伸びをする。

「やはり、気づいたか」

「まあね。まさか、ここに魔獣がいるとは思わなかったよ、セシドル」

その異変というのは、さきほどまで聞こえなかった狼の遠吠えが、聞こえてきたということだ。

しかし、ただの遠吠えではない。音が魔力の波となってきた聞こえる遠吠えなのだ。

「魔力の強さからして、魔狼くらいだな。わざわざ、こちらから出向いていなくてもよさそうだ」

第三章『風雷の剣聖』(一)(後書き)

どなたでもいいので、感想がほしいです。

自分の小説がどのようなものなのか教えていただけませんか？

第三章『風雷の剣聖』(二)

十分後、十匹ほどの魔狼が、あたりの木々から飛び出てきて、二人は囲まれた。

魔狼の大きさは、二メートルほどで、体毛が黒いせいか闇にとけている。

唯一見える部分と言ったら、妖しく光り輝く、その赤い目のみだ。

しかし、その目をじっと見てはいけない。その目は、敵を惑わし、仕留めるためにある。

普通の魔道師は、そのことを心得ているので大丈夫だが。

グルルルル……という唸り声を出し、一匹がラルファスに飛び掛ってきた。

常人ならば、その口から反吐が出そうなその唸り声を聞いて畏怖して、動けなくなるが、そんなことには、ならない。

なるはずがない。

おびえている暇がないのだ。

体毛が一気に逆立ち、雷に包まれる。

魔狼が首元を狙っていることを見切ったラルファスは、横にかわす。

休む暇なく、後ろから次の魔狼が襲ってくる。

後ろを振り向きながら、魔狼の首めがけて剣で斬りかかった。

しかし、剣は光り輝く体毛を何本か折っただけで、敵は吹っ飛ん

だ。

厄介だな。

ただ一言、ラルファスはそれのみしか思わなかった。

戦いの最中は意識せずに戦うため、それ以外の余計なことは考えなかった。

ただ一つ気にかかったのは、セシドルだ。

一瞬のみではあったが、セシドルを横目で見ると余裕そうな顔をして敵をかわしていた。

どこから、そんな余裕が生まれるのか、わからなかった。

自分が魔道師で勝てるものはない、といって驕り高ぶっているのか。

ただたんに、戦いを楽しんでいるのか。

次々と襲ってくる敵を倒すには剣の切断力を高めなければいけない。

魔法で高められることはできるのだが、それはほんの一瞬。そして魔力の消費も激しい。

こんな使いにくい魔法を使うには、敵を十分に引き寄せなければいけない。

いや、敵は不必要にはこちらの間合いには入ってこないだろうから、自分から向かわなければ、そんなチャンスは生まれまいだろう。

生きてますように……

信じてもない神にそう祈って、敵の集団に入っていた。

敵は慎重でなかなか近寄ってこない。

敵はおそろおそろこちらに近づいてくる。

次の瞬間、五、六匹の魔狼たちが、一斉に飛び掛ってきた。

かかった！

剣を薙ぐ。

外力系魔法、白光・光波斬。

特殊な光に包まれた剣は、魔狼たちの首を断ち切っていく。
唾を飲み込む時間もなかった。

一瞬で地面は朱色に染まり、物言わぬ死体が不規則に散らばっていた。

こちらの戦いが終わったころ、セシドルのほうも最後の一匹を始末しておえていた。

しかし、一向に魔力の波は消えそうにない。

いや、さきほどよりも強まった。

「デカブツが来る……」

セシドルは、それだけ告げると構えた。

突然、風が吹き始めた。

はじめは、ささやかな風だったが、次第に強まってくる。それとともに、魔力の波も強まってくる。

雷の音が『デカブツ』の到着音だった。

木から現れたのは、魔狼よりも一回りも二回りも大きい魔獣だった。

しかし、魔狼とは全く違った。

魔力はるかに強い。そして、頭には威厳のある角、永きにわたり生きていたことを明かす三つの尻尾がある。

「億の魔狼に勝るといわれている伝説の狼王フェンリルか。さっきのはウォーミングアップってことか」

その顔には、やはり余裕としか言い表せない顔があった。今度ばかりは負けるかもしれない戦いなのに。

フェンリルは雄たけびを上げる。

耳を劈く音だった。

あたりの木々たちは揺れる。

やるしかない！

そう思うと戦うことのみ頭に入れることにした。

第三章『風雷の剣聖』（三）

フェンリルは、動かない。ただ、こちらを睨んでいるだけだ。

セシドルが、跳ぶ。

それに合わせてフェンリルは、吠えた。やはり、それは魔力がこもっていた。

セシドルは、吹き飛ばされ着地した。

「まともに近づけないな」

次の瞬間、フェンリルは雷の鎧を纏い、突進してきた。

二人は、パツと離れてそれをかわす。

だが、フェンリルが纏っている雷は予想以上に広範囲でラルファスのところにも届いた。

それをなんとか、マジックシールドを瞬時に召喚して防御する。

フェンリルの雷はあたりを焦がした。

セシドルの言うとおり、近づけないな。

遠距離攻撃のみが有効か。

フェンリルは、すぐこちらに向きかえる。

またも突進してこようとする、その瞬間をラルファスは捉えた。

外力系魔法、幻影斬。

剣を薙ぐと、見えない斬撃となって相手を斬り裂くラルファス専用魔法の一つ。

フェンリルは、見えな斬撃を正面から食らう。
しかし、フェンリルの皮膚は硬く、怯ませたのみであった。

チツ。やはり硬いか。

気付けばセシドルは隣にはいなかった。
セシドルはフェンリルの真上にいる。

外力系魔法、『ナーダ魔術の書』奥儀、聖拳・白虎。
拳を振り下ろすと、そこから巨大な白虎の衝撃波が出る。

それに気が付いたフェンリルは、それにむかって口から青白く輝く光を放った。

その光は雷、フェンリルのブレスだ。
そのブレスは、巨大な白虎を抑える。

フェンリルは、白虎をおさえようと必死になっていて、こちらに
気付いていない。

魔力を最大限にためる。
外力系魔法、滅光・砲

両手を前に出す。

そこから、一筋の光がフェンリルに向かって放たれる。
白光・砲の発展系。
分子レベルまで消滅させる魔法。

フェンリルは、その巨大な光に気付いた。
その瞬間、フェンリルのブレスは白虎を貫いた。

そのブレスは、セシドルの頬をかすめる。

そして、フェンリルはこちらに向き直る。
一筋の光はフェンリルを飲み込む。

その瞬間、光は閃光となり、大地を震わすような巨大な爆発音になる。

おもわず、目をつむり、耳をふさぐ。

倒したか？

そう思い、目を開けてみる。

その目には、焼け焦げた草と消滅したはずのフェンリルが映った。

自分の全魔力を使ってまでも放った、あの魔法が破られたことに絶望感を覚える。

しかし、フェンリルの体には無数の傷の跡がある。

ところどころには、血も流れている。

ダメージを与えたことには与えたのだろう。

しかし、それがフェンリルの怒りに火をつけてしまった。

弱るはずのダメージだったものが逆に怒りによって強まってしまった。

これはヤバイ。

とっさにそう思い、ラルファスは間を空ける。

フェンリルは、吠える。

空からは雷が降り注ぐ。

無数の筋がフェンリルの周りに降り注ぐ。

セシドルは、ラルファスに近寄ってきた。

「お前、絶魔を持っているか？」
そう聞かれた。

「いや、まだ編み出していない。絶魔級の魔法ならあるけど……」
「よし、それを出せる魔力を今持っているか？」
「……………」

「なら、俺の魔力を分ける。それを一斉に使ってフェンリルに止めを刺す」

無言で了承する。

魔力を分けてもらうというのは妙な感じがする。
自分の腹が満たされていくような感じだ。

フェンリルは、こちらを伺っている。
と、次の瞬間、フェンリルは動く。

フェンリルは、跳ぶ。
空中で静止すると、プレスをはく。さきほどよりも、さらに強い。
真っ向から受けるわけにもいかないなので、敵の死角、つまり下に逃げ込んだ。

外力系魔法、滅光・砲。
ラルファスは、滅びの光を放つ。

外力系魔法、『ナーダ魔術の書』奥儀、聖拳・龍神。
セシドルは、虚空に巨大な金の龍の衝撃波を召喚する。その龍は、
東洋風だった。

フェンリルは、気付く。

しかし、もうおそい。

滅びの光を浴び、そして、金の龍に噛み砕く。

絶対の力をフェンリルは、受ける。

巨大な爆発音が、森中に轟いた。

今度は閃光は出なかった。

一瞬にして、半径五十メートルほどにある木々は消滅してしまっ
た。

フェンリルの放っていた魔力も一瞬にして消えた。

ラルファスたちは勝ったのだ。

第三章『風雷の剣聖』（四）

翌日、ラルファスたちは昨日の激戦のせいで眠れなかったせい、寝不足だった。

ラルファスの顔は、いまだに女を魅了する美貌ではあるが、やつれているせいで、かなり肌の艶が失われていた。

セイドルも、ラルファスとは違う系統で女を魅了する美貌ではあったが、彼と同じくやつれていた。

二人は、不気味な森の中を歩いている。

魔力は、フェンリル戦で消耗してしまって、今はごくわずかだ。それも、あと一回魔法を放てるかどうか……

休もうと思っても休む暇はない。

なぜなら、食料がつきかけているからだ。

食パンは一日分しか持ってきていない。

周りには、獣もない。

これでは、到底森を出る前に倒れて死ぬのがオチだ。

二人は、精神面でも体力面でも確実に限界に達しようとしているのだ。

『そこのお二人さん、少しいいですか？』

ラルファスは思わず、さっと腰にある剣に手をかけ、後ろを振り向いた。

今のはなんだ？

全く気配が感じられなかったぞ？

しかし、振り向いた先にいたのは、ごくごく短い白髪混じりの黒髪に、しわの多い顔の男、いや老人がこちらを見ていた。

「お前誰だ？」

セシドルは、険しい表情で言う。

セシドルも、気配を感じ取れなかったに違いない。

「これは失礼。私は、この森の唯一の住人、セドリック・マツカートニーです」

セドリック・マツカートニー

この名前、どこかで聞いたことがあるような気がしてならない。

「それで、君たちはこの危険な森で何をしていますか？
それは、あなたにも言えることでは？」

ラルファスは瞬時にそう思ったが、黙って飲み込んでおいた。

「俺たちは、フェース国へのたびの途中に、この森を通りかかっただけだ」

「ほほお、そうですね。長旅で、さぞ疲れたでしょう。私の家に来て休んではいかがですか？」

ラルファスたちは、お互いに顔を見合って喜びの笑みを見せ合った。

こうして、ラルファスたちは、セドリックの家に行くことになった。

§

§

歩くこと十分、セドリツクの家に着いた。

セドリツクの家は、一人で住むには充分すぎるほど大きい木造の家だったが、外見は意外と質素だった。

セドリツクは「どうぞ」と言っつて、ラルファスたちを木のいすに座らせてから、

「コーヒーが、いいですか？ それとも紅茶が、いいですか？」
ラルファスもセシドルもコーヒーを選んだ。

ラルファスは、コーヒーが運ばれてくるまでの時間、考え事をしていた。言うまでもなく、さっきの気配のことについてだ。

74

なぜさっき、気配を感じられなかったんだろうか？

あんなに近くに寄られたら、気づくはずだけど。

セドリツク

この名前、昔聞いたことがあるような……

まあ、結論はセドリツクさんが、『ただ者』ではないということになるのかな。

ここでの『ただ者』とは、一般者のなかでの『ただ者』ではない。能力者としての『ただ者』ということだ。

一般的に能力者というと、『魔法使い』や『魔道師』と勘違いさ

れやすいが実際は、それだけではない。

能力者というのは、一般人ではありえないことをやってのける者のこと。

例えば、ラルファスが出会った魔力を持っていない能力者は、魔物を手なずけていた。魔力を持った者で、『召喚』と呼ばれる能力を持っていないならば、魔物を手なずけられるだろうが、魔力すら持っていない者には不可能だ。

こういう能力を持って生まれてくるものは、意外と多い。そのなかでも、この能力者は『魔物使い』と呼ばれている。

他にも、どんな状況や疑問や謎でも、瞬時に最適な『答え』を出せる『アンサー・トーカー』などがある。

まあ、普通に考えれば『魔法使い』ないし『魔道師』が妥当かな。

そんなことを考えているうちに、目の前にコーヒーが運ばれてきた。

なんとも言えない、良い香りが流れてきて、思わずホワツとした気持ちになった。

セドリックも座り、コーヒーを飲む。

それにつられて、ラルファスたちも飲む。

「そういえば、あなたたちのお名前を聞いておりませんでしたね？」ラルファスたちは、軽く自己紹介した。

「ほほお、あなたたちは、セシドルさまとラルファスさまでしたか？ わざとらしく、セドリックは驚いた形相をする。

「あなたたちの武名は、こんなド田舎でも轟いていますよ」

なんていうかこの人はお世辞がうまいな、と妙なところで感心した。

セシドルはともかく、ラルファスはナーダ国の魔道師になつてから間もないというのに……

「ところで、少し聞きたいことがあるのだがいいか？ セドリックさんの正体は何なんだ？ こんな魔の森という名前からして危なっかしい所に住んでいるなんて、一般人ではないだろう？」

セドリックは、わざとらしく大きなため息を漏らしてから話した。

「あなたは、年長者に対する敬意がこもっていませんね」

横を見ると、セシドルは顔を真っ赤にしていた。

その姿を見て、思わず笑いたいという衝動に駆られたが、なんとか堪えた。

「まあいいでしょう。お教えします。私は、かつてフェグティス国の第五十二代魔道師団長を務めていました」

あっさりと言ってくれた。

その後にも話は続いていったが、聞いていなかった。

驚きを隠せないでいた。

§

§

フェグティス国の第五十二代魔道師団長、セドリック・マッカートニーは数多の伝説を作り出したきた。

剣を片手に、一人でフェース国の飛空挺団ジャステイスに立ち向かい、それを追い払ったということや、最強の魔獣である古龍を傷を負いながらも一人で倒したなど

そうした伝説を作り上げてきた彼は周囲からこう呼ばれるようになる。

『風雷の剣聖』

風の如く華麗に、雷の如く強靱な剣の舞で彼は不敗を築き上げていた。

しかし十数年前、突然消息を絶った後、誰も彼の姿を見たものはいないという。

§

§

まさか、伝説の魔道師がこんなところにいたなんて、誰も思いもしなかっただろう。

それよりも、目の前にいるこの老人が、『風雷の剣聖』セドリツク・マツカートニーということに気づかなかったのか、不思議でたまらなかった。

「まさか　これで説明がつかます。さっき、あんなに近づかれても気づけなかった訳が」

ラルファスは、歯車同士が、かみ合ったような感覚を味わった。モヤモヤ感が消えた。

「それは、置いとくとしましよう。昨日、この森の主であるフェンリルを倒したのは、あなたたちですか？」

それは、もはや疑問をぶつけるような口調ではなく、事実を確かめるような口調だった。

「まあな。俺たちの絶魔級の魔法をまともに食らったからな。あつけなく消滅してしまったよ」

「ハハハッ、と快調に笑うセシドルだったが、セドリックは難しい顔をしていた。

不幸か幸いか、ラルファスはそれに気づいた。

この顔、まさか？

「いえ、あなたたちは、どうも勘違いしているようです。フェンリルは、まだ死んでませんよ」

そのまさかだった。だいたい予測はついていたものの、驚きがかくせなかった。『開いた口が塞がらない』とは、まさにこのことだろう。

しかし、いまだに信じられなかった。

僕たちの魔法をくらったのに生きている？

それも、絶魔級の……

「信じられないようですが、これは動き難い事実です。そもそも、フェンリルは魔獣の中でも上位種ですよ。心臓を貫かない限りは、死にはしません。どんなに強い一撃を食らったとしても。一時的に消滅するかもしれませんが、それに、フェンリルは厄介なことに、執念深い魔獣です。必ず、あなたたちを倒しに来ます。そして、次ぎ合ったときは、さらに強力なっているでしょう。あなたたちの手が負えないくらいに」

第三章『風雷の剣聖』(四)(後書き)

だれか、御感想を……
いつでもお待ちしております。

第三章『風雷の剣聖』（五）

ラルファスは、これを聞いてもなんとも思わなかった。実際には驚きはしたが、怯えるなどという感情はなかった。普通の人なら怯えていたかもしれないが。

いや、隣のセシドルも同じく、冷静だった。

魔道師というのは皆こうなのかもしれない。

かつての宿敵だった魔人は消え、そして古龍も消えて、現代最強の生き物なのは魔道師なのだから。

それゆえ、宿敵がいなく競争相手がいないせいも、自分が最強だと驕り高ぶっているのかもしれない。唯一の敵といえば、他国の魔道師のみだ。

「あなたたちが、お強いのは良くわかります。しかし今度ばかりは、今のあなたたちでは相手にできませんよ」

「何が言いたい？」

「私は生涯、弟子を持つと思うてはいなかったが、これも神から与えていただいた宿命。私の弟子になってみないか？」

ラルファスは、内心ほくそ笑んだ。

まさか、伝説の魔道師、しかも自分の目指していた魔道師の弟子になれるなんて思わなかった。

信じてもない神が目の前に現れて、金銀財宝、おまけに絶世の美女をもらった、そんな気持ちだった。

しかし同年代の友人は、すぐこの気持ちを台無しにしてくれた。

「何故だ？ なにか企んでいるのだろうか？」

いつもは、比較的（あくまでも比較的だが）落ち着いた表情なの

だが、今はとても険しい顔、いや訝しそうな顔をしている。

「人に伝授するとき企むも何もあるかい？」

対してセドリツクは、終始、笑顔で言う。

「俺を甘く見るなよ……？」

一瞬だった。セシドルの拳が白に光り輝き、のどの突きつけたのは。

ラルファスは、その一瞬に対応しきれなかった。

止めにかかるうとしようとしたりしたときは、すでに遅かった。

「何故、今頃となつて弟子を作ろうとする？」

千切れんばかりの顔で言う。

「まあ、落ち着きましよう。そんなかつかしなさんな」

セドリツクは、いつまでも平常心を保ちながら、その手を右手でどけた。

こんな状況に陥つても、冷静なところを見て、ラルファスはさらに尊敬の目で見つめた。

「私は、無駄な命が消えるのが嫌なのだよ」

「……見え透いた嘘だな」

セシドルは、静かな声で言った。小さすぎて、ラルファスには聞こえなかった。

セドリツクは、小さな笑みを漏らした。

「ほほお、何故それが嘘だと思つたんですかな？」

「無駄な命が消えるのが嫌だったら、こんな陰気な場所でひっそりと暮らしているはずがない。それならフェグティスで魔道師を続けていたはずだ」

セドリツクは、ハハッと短く笑った。

「なかなか鋭いですな、セシドルさま。しかし、あなたはひとつだ

け間違えておらつしやる。私は、無駄な命は消したくない。だれであるうと。あなたたちには私の企みお教えできる資格を持っておらつしやる」

「……………」

「あなたたちはフェース国へ向かっていらつしやると、おつしやていましたね？」

「はい」

ラルファスはなんとなく、自分が話の輪からはずされる気分になつたため、強引に話に参加した。

「フェース国は、クリスタル境界石を持つている国を襲い、強奪している。だから遅かれ早かれ、ナーダ国は滅ぶだろう、そう思つてあなたたちはフェース国への使者として向かっているのでしょうか？」

「ああ」

今度答えたのは、セシドルだった。

「ところで、あなたたちは知っているのですか？ どのようにして国を襲うのかを」

「飛空挺団ジャステイスではなかったですか？」

「そうです。しかし、不思議だと思いませんか？ 十五年くらい前、私がジャステイスを壊滅にまで追い込んで、その後、名前すら忘れられるほど衰退したにもかかわらず、最近となって突然、活躍し始めたんですよ？」

確かに不思議だ。

一度、衰退したものが、再び世界から脚光を浴びるには、数年という時間をかけて、地道に戦功などをたてなければいけない。ましてや、壊滅にまで追いやられたものは、なおさらだ。

しかし飛空挺団ジャステイスは、その過程を無視して突然、世界中にその名を轟かせた。

普通は有り得ない。

「飛空挺団ジャスティス、いやフェース国の裏には、なにか謎めいたものがあるように思うのだよ」

ラルファスは正直、この話と弟子の話のどこに接点があるのだろう、と思った。

「近々、私もフェース国へ向かおうとしていたところなのだよ。理由はもちろん、わかるでしょう。フェース国で何が起きているか、確かめるため。なるべくなら強力な相棒が欲しかったのだよ。私一人では、なんだか心細くてね……だから、あなたたちを弟子にしたかったのだよ。これが私の企みだよ」

人通り話し終えた。

すると

「……なんだか面白そうだな」

セシドルは、真剣な顔をして言う。

そんな顔をして言うので、噴出しそうになった。

それよりも、セドリックの弟子になれたことがうれしかった。

セシドル、この気持ちを台無しにしてくれたのは怒るけど……結局、弟子になれてから許してあげよう。

そつ心でつぶやいた。

と、急に体が締め付けられるようで苦しくなった。

セシドルも、同じらしい。

呻き声を声に出すのも、ままならない。

「ちようどいいタイミングですな。フェンリルが来ましたぞ」

この体を締め付けるような力、魔力ですか？

ラルファスは、心の中で呟いた。

第三章『風雷の剣聖』（六）

それほどまでに、魔力が強かった。

セドリックは、ゆっくりとした歩調で外に出る。ラルファスたちは、慌ててその後についていく。

突然、突風が吹き、あたりの木々は、ざわめく。大地を叩きつける、足。

それは、この森全体に木霊していた。木々の表情は、ガランと変わり、さきほどまで静かだったものが、ラルファスたちを威嚇するように、大きく揺れていた。

「森の主の怒りは怖いですぞ。心して挑みましょう」
そんな悠長なことを言っていた。

手には、いつの間にか真っ白なオーラとプレッシャーを放つ魔剣を握んでいた。

もしかすると、このプレッシャーはセドリックが放っているものかもしれない。

そうだとすると、かなりのものだ。

§ §

まもなくすると、魔力がさらに強くなり、動くことさえままならなくなつた。

もう、すぐ近くにいるということだ。

セドリックは、アップを始めている。
ラルファスも、気分の高揚を感じていた。

やっぱり、魔道師は、戦うために生きているようなものなものな。

フェンリルの低い咆哮が轟く。

その咆哮は魔力も伴っていて、竜巻のような風を巻き起こした。
あたりの木々は、吹っ飛び、ラルファスたちは、目を瞑った。

次に目を開けたとき、おもわず目を見張った。

フェンリルを中心として、あたりの木々が、なぎ倒されている。
そして、問題のフェンリルは、黄金のオーラを纏っている。

神話上で出てくるフェンリルとは、全く違った。

獰猛で、赤い瞳がこちらを伺っている。

一瞬の間ですら、奴に殺される。

そう思い、動かないでいたラルファスの前にいるセドリックは早
速動いていた。

速いッ！

百メートルはあるであろう距離を、一瞬で詰め、自分の間合いに
奴を入れた。

右手の剣は奴の首下に吸い込まれる。

しかし、フェンリルは、後ろに後退し、かわす。セドリックは、躊躇なく、次の攻撃に移った。それは、超自然的で、人間の限界をはるかに超えていた。彼にとつて、一瞬というのは、遅すぎるのかもしれない。彼の世界と、自分たちの世界の違いを思い知らされた。

次の攻撃は、フェンリルの右肩に傷を負わせた。そこから、血が飛び出てくる。

セドリックは、猛攻撃を続ける。

しかし、セドリックの攻撃は一瞬の隙すらない。

フェンリルは、反撃できずにいた。

人類最強の男といってもいい。

フェンリルは、知らず知らずに後退していた。

もはや、これまでと思つた瞬間、フェンリルはとうとう反撃に移った。

黄金のオーラ　雷は、フェンリルを完全に覆う。

高压の電撃はあたりを焦がし、セドリックにも及んだ。

咄嗟にセドリックはマジックシールドを張った。

しかし、その高压の電撃をマジックシールドは完全に吸収できず、仕方なく後ろに引いた。

その隙を見逃さずにフェンリルは、巨大なブレスをはく。

昨日はあつた、溜めの動作はなく、一瞬で黄金のブレスをはいた。

それは、大の大人を五人分並んだくらいの幅だった。

セドリックは、それをかわさず、突つ立ったままだった。

唯一なにかしたといえ、右手を前に出したということくらいだ。

ブレスが、直撃する。

しかし、直撃したはずのセドリックは無傷で立っていた。

たった、右手であのプレスを粉碎したのだ。

セドリックは、剣を帯にしまう。

そのあいだ、フェンリルは、警戒していた。

そして、セドリックは次の動作に移った。

セドリックは目を瞑ったのだ。

しかし、それでも隙はない。

しばらくすると、小さな光が無数に集まってきた。

まだ、昼間だというのに、それを遥かに超える光だった。

そして、その光が集まり、強烈な光を生み出した。

それは、目を開けていたら失明するというくらいの明るさだった。

目を開けると、セドリックの両手は槍投げのときに使われるよりもずっと大きい槍を掴んでいた。

そして、セドリックは、目をカツと開き、フェンリルを睨む。

フェンリルは怖気づくが、逃げはしなかった。

勝敗は決した。

ラルファスはそう思った。

「もう勝負は決まりました。ですが、魔の森の主よ、あなたは、この私に負けても主と呼べましようか？ 情けはかけません。これが、戦いの宿命ですから」

セドリックは、ただそれだけ言った。

そして、当然のように、セドリックは槍を思い切り投げた。その槍は、フェンリルの心臓に吸い込まれていく。フェンリルは、それから逃れるように、空高く飛ぶ。しかし、その槍も軌道を変えて、空に向かう。

「魔の森の主よ、潔く死んだらどうですか？」

フェンリルに語りかけるように言った。

「苦しませはしませんよ」

その瞬間、空では、槍がフェンリルの心臓を貫いた。

フェンリルは、落ちていく。

わずか、五分の戦いだった。

ラルファスは急に、体にかかる圧力が解き放たれ、一種の解放感を味わった。

セドリックの顔は、疲れすら感じられなかった。

激闘の中で、疲れないなんて、タフだな。

ラルファスは、そう思った。

確かに、セドリックは強かった。

第三章『風雷の剣聖』（七）

「どうでしたか？」

ラルファスは、絶句する。

何もいえない。

さすがは、古龍を倒しただけのことはある。

§

§

そういえば、古龍にまつわる古くからの伝説がある。

それは、龍人伝説だ。

古龍を相手に勝利すれば、倒した古龍の能力をすべて引き継ぐことができるという。

能力を引き継いだもの、それが龍人だ。

そんな伝説があるせいで、一昔前には古龍に挑みかかるものが、絶えなかったらしい。

そのほとんどが、若者だった。

しかし、古龍を倒して帰ってきたものはたったの一人もいなかった。

その伝説は今日までずっと伝わってきたものだ。

だが、古龍の存在自体も今では伝説化されてきている。

§

§

ラルファスは、不意にセドリックが龍人なのではないか、という疑問が出た。

いや、龍人なのだろう、セドリックさんは。

なにせ、セドリックには、古龍を倒したという噂が流れている。

「いや、どうでしたか、と聞かれても、なあ？」

セシドルは、こちらに向かって聞いてきた。

セシドルのその一声で、現実世界へ戻ってきた。

黙って頷く。

「そうですね。さて、ここには、もう未練など残っていませんから、早速フェース国へ向かいましょう」

無言で頷き、歩き始めた。

§

§

道中、ラルファスたちは、セドリックから色々なことを教わった。龍の生態やら、召喚魔法、魔法具など。

そのなかでも、特に興味がわいたのは、『なぜ魔法が生じるか』についてだ。

魔法が、一体何なのか、ということを知らないでラルファスは使っていたため、これは気になった。

「魔法というのは、二つある特別な粒子のうちの一つ、魔粒子とよばれる粒子を震わせることによって生じるのです。」

もう一つの粒子は、どういう性質なのかわかっていないため、奇粒子と呼ばれています。

魔粒子は、この世界全体を覆っている粒子で、魔粒子を振動させることさえできれば、誰でも魔法が使えるというわけですな。

しかし、この魔粒子を振動させるためには、物理的な振動ではだめなのです。魔粒子は、心理的な振動にしか、反応しないのです。

浮かない顔をしていますね。もう少し詳しく説明しましょう。

人には、生まれながらにしてコアと呼ばれるものがあります。コアとは、その人の心の特質、つまり、性格そのものなのです。

しかし、稀に特別なコアを持って生まれる者がいます。

その者が、能力者で、能力者の大半が私たちのような魔法を操られる者、魔法使いや魔導師となるのです。その特別なコアを持ちながらにして、長い間、その才能が開花しない者もいるようですが。

話がそれてしまいましたね。

特別なコアは、その者の喜怒哀楽に過剰なまでに反応します。

そのときのコアの興奮と言いましようか、それが、やがて魔力になり、そして心理的な振動に発展し、魔法が生じられるのです」

「ちょっと、いいか？ セドリックさんの言っていることだと、俺たちがいつも喜んでいたり、怒こっっていたり、哀しんでいたたり、楽しんでいたりしているって言うことか？」

「いえ。私の説明不足でした。

その者の喜怒哀楽に過剰なまでに反応するということは、そのときに生じる魔力が通常よりも強まり、魔法も強いものが出るという意味です。

ですから、通常、無心でも特別なコアは反応しています。たいがい、魔法を使うときと言うのは、切羽詰まったときですから、無心

ではないはずです。魔法の練習をしているときよりも実践のほうが威力が強いのは、そういう理由があるからなのです。

わかりましたか？」

ラルファスは、これを聞き、少し魔法について考え直すことにしたのだった。

第四章『畏』（一）

ナーダ国を出て三週間はたった。

魔の森で、セドリックと出会い、一緒に旅をしている今、ラルファスの技術は高まるばかりだった。

そんななか、ラルファス一向は、ついにフェース国の領内に入り、その二日後には、フェース国の都、ロンズに着いた。

「なあ、ラル。とうとう来ちまったな」

ラルファスと、セドルの仲は、さらに良くなっていた。

「とても長かったなあ」

「なにを呑気なことを言っているのですか？ あなたたちの目的は、フェース国に着くことではないですよ。フェース国王の真意を確かめるためですよ？」

「わかっています、セドリックさん。でも、これだけでもいいような気がして」

「まあよいですよ。それよりも、まだ夕暮れ時には、程遠いですが、宿を探しましょう」

そう言って、ラルファスたちは、歩き始めた。

ラルファスたちの、フェース国までの道のりは、そう簡単なものではなかった。

盗賊に出会ったり、門が閉まっただけで町には入れなかったり。それを乗り越えてやっと着いたのだから、喜ばずにはいられなかった。

ラルファスは、有頂天になっていた。

それからまもなく、宿も見つかり、そこで一晩過ごした。

§

§

翌朝、ラルファスが起きると、セドリックがいなかった。そのかわり、テーブルに、書置きがあった。

ラルファスさま・セシドルさまへ

な？
これを読んでいるということは、もう起きたということですか

私は、私の目的を達成するため、出かけています。
夜には、帰ってきますので、ご安心を。

さて、あなたたちがもし、フェース国王とご面談なさるのであれば、いくつかがご忠告がございます。

まあ、老人のお節介だと思って読んでください。

- ・敬語を使うこと
- ・決して、怯まないこと
- ・油断しないこと

これらを、頭の中に入れて臨んでください。

リック

セド

PS もし、連絡したいことなどあれば、私の心へ話しかけてきても良いです。

やりかたは、わかるでしょうか？

一通り読み終わると、ラルファスは、大きなあくびをして、セシドルを起こしにいった。

§

§

十時を過ぎたころだった。

ラルファスと、セシドルはフェース国王の住むクレアス城の客室間で、国王が来るのを待っていた。

しかし、十分、二十分待つても来ない。

ラルファスは、焦れたい気分となった。

三十分を過ぎようとした、そのころ、客室間に一つだけしかないドアが開いた。

そこからでてきたのは、顔の頬に太い傷が顎まで引かれている男だった。

身長は高く、ラルファスくらい。

腰には、剣をさしている。全身真っ黒な服装で、それが威厳を持っている。

昔は、歴戦の戦士だったに違いない。

明らかに王専用と思われる椅子に座る。
すぐさま、ラルファスたちは、挨拶をする。

この方が、ナイゼル・フォウ・フェースなのか

王たる器が備わっていた。

悔しいが、ナーダ国の女王フレイヤ・レイド・ナーダよりも器量があると思えてしまう。

そして、用件を伝える。

王は、ただ「うむ」と言っただけ、それ以上何も言わず、こちらを鋭い目で睨み付けてきた。

まさか、ご機嫌を損ねてしまった？

こうなると、それ以外ない。

ラルファスは、完全に気後れしてしまった。

威圧感で、心が押しつぶされてしまいそうだ。

そのとき、今朝見た書置きを思い出した。

決して、怯まないこと

心の中で、この言葉がこだました。

気を取り戻して、王の威圧感を真っ向から受けた。

それは、魔力そのものといってもよいものであったが、とても人間とは思えないほどおびただしかった。もしかしたら、魔獣以上かもしれない。

王の顔がほんの少し変わった。
それは、本当に気をつけなければわからないほど微量なものだった。

口元が少し緩み、ほお？ というように挑発的だった。

「クリスタル結界石をなぜ奪うか、だったな？」

「はい」

「それは、予の望みをかなえるためよ」

「望み、ですか？」

「そうだ。汝らは、聞いたことはないか？ クリスタル結界石伝説を」

クリスタル結界石伝説など聞いたことはなかった。

しかし、クリスタル結界石は神聖なものだから、伝説はあるのは言うまでもない。

「いえ、全くわかりません」

「クリスタル結界石伝説とは、この世に存在するクリスタル結界石を全て集め、この世界のどこかにあると言われる、『空間の塔』の頂上に捧げれば、その者の望みが叶うというものだ」

つまり、色々な国を襲っている理由は、自分の望みを叶えるため、ということなのか。

ずいぶんちっぽけな王だな。僕の見込み違いだったのかな。

第四章『罇』（二）

第四章『罇』（二）

「フェース王、あなたさまの望みは、どのようなものでしょうか？」
セシドルが口を開く。
さすがのセシドルも、敬語を使わざるを得ない。

「うむ。予の望みは『完全なる闇』、『完全なる支配』である」
「『完全なる闇』？」
二人して口をそろえる。

「うむ。汝らも、来るべき時がくればわかるであろう。その時まで
待ってるがよい」

フェース王は、薄気味悪い笑みをこぼした。

「フェース王……あなたさまは我らが思っていたような偉大なお人
ではなかった。あなたさまのお言葉、一言一句正確に我らの主に伝
えておきます。では、これにて失礼させていただきます」

その途端、突然フェース王は、立ち上がった。
威厳を感じる大きな声が、客室間全体に轟く。

「待て、汝ら。汝らは、勘違いしてはないか？ 予の野望は、秘密
である。秘密であるその野望を教えた汝らを、ナーダ国に帰すわけ
にはいかぬ」

この言葉を聴いてようやく「謀られた」と思った。

しかし、既に時は遅い。

客室間にある唯一のドアから、おそらく王の近衛兵であろう格好

をしている兵士たちが十人くらい、ゾロゾロと出てきたのである。

すぐさま、ラルファスはセドリックの心にコンタクトを試みる。すると、すぐ反応が返ってきた。

『どうしましたか？』

『セドリックさん、フェース王に謀られました』

『謀られた、ですか？』

『そうです』

『なんとか切り抜けられそうですか？』

『わかりません』

『とりあえず、宿で落ち合いましょう。この後のことは、そこで考えましょう』

フェース王は、右手でラルファスたちを指した。

それが合図だったらしく、近衛兵たちが襲い掛かってきた。

ラルファスは、剣を抜き、襲い掛かってきた兵を横薙ぎにする。

『わかりました』

しかし、近衛兵の鎧は思ったよりも厚く、剣は弾かれてしまった。仕方なく、剣を腰に挿し、ラルファスは右手を兵の胸に当てる。

外力系魔法、セドリック秘奥、白電掌。

掌から白銀の電撃が出る。その電撃は、兵の胸を焦がす。あたりは、タンパク質が焦げたようなにおいが発生した。

その兵は、ガクツと倒れこむ。

他の兵は、その兵をまたいで、切りかかってくる。

今度は、わずかゼロコンマ数センチほどの正確さで敵の剣筋を見切り、横にかわす。

そして、ラルファスは肉体強化をして、剣腹を思い切り叩き割った。

その兵は、そのときの衝撃に耐えられなく、剣を落としてしまう。

その兵は、戦えなくなったが、肉体強化をした腕で殴り殺す。

その威力は凄まじく、鎧込みで体重百キロは超えているだろう兵士を軽々と、殴り飛ばし、壁まで吹っ飛んだ。

それを見た、残りの兵士たちは、「こいつらは俺たちが戦って勝てるような奴ではない」と、思ったらしく、逃げていった。

「ああ、憂鬱だなあ」

ラルファスは言う。

「それ、人を殺したときに言う言葉か！」

「そういえば、フェース王いないなあ」

セシドルは、あたりをキョロキョロする。

「確かに。どうせ、逃げたんだろう。それよりも早く逃げようぜ」
「そうだな」

そう言って、二人は客室間を出て、走った。

§

§

「ところで、セドリックと、どこで落ち合っただ？」

走りながらセシドルは聞いてきた。

「えーと……昨日泊まった宿」

「そうか」

二階から一階に行く階段がある広場で、ラルファスは止まった。目の前には、近衛兵たちがたくさんいた。

セシドルのほうを見ると、苦虫をつぶしたような顔をしていた。

「おい、お前たち。今から言うことを怒らずに聞いてくれるか？俺たちは、魔道師だからといって、人殺しが好きなわけではない。やむを得ない場合にしか、人は殺さない。どうせ、お前たちの努力は報われないんだから、ここは俺たちに道をゆずって……だから、最初に怒るなって言っただろう？」

兵士たちは、カンカンに怒っていた。

色々なところから、「こいつ馬鹿か？」とか「ガキなんかには負けるか！」「みたいな言葉が交わされていた。

「まあ、わからないならしょうがないけどな」

そついい終わる前に、セシドルは既に動き始めていた。

「今回は、俺に任しておけよ。さっきは、お前だったんだから」

第四章『畏』（三）

「わかったよ」

「パアツと景気よくいくぜ！」

それを言い終わる前に、セシドルは、既に近衛兵の前列部をほとんど全滅にしていた。

「こいつ、意外とやるぞ！」

一人の兵が言う。

「もう、遅えんだよ」

セシドルは、素手で殴り倒す。

力なく倒れこんだその兵を、視界の隅にすらいれずに次の敵に殴りかかった。

「皆の者、広がれ！」

今戦っている兵の後ろから聞こえてきた。

そうすると速やかに、固まっていた兵が広がった。

「弓矢部隊、構えー！」

上に潜んでいた弓矢部隊が一斉に出てきた。

「やれやれ……しょうもないやつらだな。近距離戦では勝てないから遠距離戦では勝てると思ったのか？ 頭が悪すぎて泣けてくるあ。それなら、まだゴキブリの方がマシだな」

「強気なことを言っつて、本当は怖いんだろう？ すぐ楽にしてやるからな。弓矢部隊、射てー！」

一斉に、セシドルに向かって射る。

やれやれ、困ったものだ。

「喝！」

外力系魔法、戦声。

外力系魔法、波砲に似てはいるが、それとは構造が違う。波砲は、衝撃波による振動で、戦声は大気中を振動させる、つまり音による魔法だ。

それにより、弓矢はセシドルに当たる前に振動により、力なく落ちた。

「そ、そんな……」

「だから言っただろう？ ……ところで、何もしていない潔白な人間を襲うって、どういう御了見だ？ それでいて、生きて帰られると思うなよ？ 俺の拳がえらく血に飢えているぞ？」

不気味なほど笑顔で言う。

「くッ……まだだ。お前、フェース国の軍事力をナメてるだろう？」

「さあ、我が新兵器を使おうではないか！」

「待て……」

そう言ってでてきたのは青年だった。

その青年は、その隊長格の男の肩を後ろから叩いてとめた。

「はあ？ ……ウイング様！」

その大柄で穏やかな顔をしている青年は、ウイングという名前らしい。

近衛兵の格好はしているものの、どこかに気品があって、威厳が感じられる。

きつと、近衛兵長くらいの身分だろう。

そして、ウイングという青年からもフェース王と同様に人間とは思えない魔力を宿している。

「ジード、お前たちは下がっている。後は、私が殺る」
「はー！」

そう言い、ジード、それ以下の者たちは、あわてて走っていった。下がるというよりも、逃げるといふ表現のほうが正しいかもしれない。

「私は、近衛兵長、ウィング。さきほどは、私の部下が失礼した。詫びる。しかし、これは陛下の命令。陛下の命令は、絶対だ。すまぬ。情けをかけるつもりはない。潔く散られよ！」
そう言つと、ウィングという青年は、腰から剣を抜く。

ブウウウウウン！

聞いたことのある音が響く。

魔剣！

ウィングが持つその剣は黒いオーラを放つ魔剣だった。

やばいなあ。

ラルファスは、そう感じた。

「セシドル！ 僕も参戦するから」

「ああ、願ひする」

『セドリックさん』

『なんです、今度はどうしたのですか？』

『今度は、切り抜けられそうもありません』

『どうしたのですか？ 詳しく教えてください』

『近衛兵長、ウイングという男と今、戦闘になりそうです』

『ウイング……聞いたことのない名前ですが、その方がどうしたのですか？ あなたさまなら勝てると思いますが』

『それが、どうやら魔法が使えるようです。魔力は魔道師なみです。そして、魔剣も持っています……』

『フェース国に魔道師はいなくなつたはずですが……わかりました。』

『今、そちらへ向かいます。場所はどこですか？』

『クレアス城の二階から一階に行ける階段がある広場です。入つたらわかると思います』

『わかりました。なんとか堪えていてください』

『ああ、わかつた』

『わかりました』

セドリックとの交信を終えた直後に戦闘は始まった。

突然、ウイングが消失した。

次の瞬間、セシドルの目の前に現れた。

速いッ！

敵は、無造作に剣を薙ぐ。

それを後ろに跳躍してかわす。

数回回転して着陸する。

ラルファスは、剣を強化し、ウイングに遠隔攻撃を放つ。

外力系魔法、幻影斬。

見えない斬撃は、敵の魔剣で受け止められた。

なぜ？

なぜ、僕の幻影斬が見えるんだ？

ラルファスは、剣を目の位置に持ってきて突進する。

一瞬のうちに間合いを詰め、斬り捨てる。

外力系魔法、瞬斬。

敵の急所を一瞬で斬り捨てる一撃必殺の魔法だったが、それも魔剣で弾かれ、わずかに頬に血筋を入れたのみだった。

しかし、その傷も一瞬で消える。

「それだけか？ ナーダの魔道師は、これほどまでに弱いのか？」

挑発に乗るな、と自分を叱咤する。

「なら見せてやろう、俺の本気を……」

「ほお？」

「外力系魔法、我流、聖拳・円陣！」

セシドルは、右拳を強く地面に叩きつける。

その瞬間、ウィングの周辺には結界が張られた。

そして

とても大きい破壊音とともに、銀色の一筋の光がウィングを包んだ。

煙はなく、この城が壊れない程度にやっただけらしい。

それでも、致命的なダメージを負ったはず。

だが、出てきたのは無傷のウィングだった。

「ほお、これがお前の本気か。危うく死ぬところだったよ。次は私

の番だ」

ウィングは剣を地面に差し込む。

「外力系魔法、絶魔、天嵐」

突然、巨大な竜巻がいくつか現れた。

「我が魔法は風。それをお前たちに受けきれるか？」

複数個ある竜巻は、ラルファスたちに迫りつつある。

轟音が、ラルファスの耳を劈く。

『ジ・エンドだ』

第四章『畏』（四）

セドリックは、クレアス城内を走っていた。

「ふむ。これは、強い結界が張られていますね。これなら本気を出しても大丈夫そうです」

ラルファスさまが言っておられた階段というのはここですかな。

実際そうであろう。

その階段の上からは、凄まじい魔力が感じられるのだから。

その階段を颯爽と駆け上がる。

セドリックが上った先で目にしたものは、とても信じられないものだった。

いつもは、細い目を大きく見開いたほどだ。

ラルファスたちの戦いは、もはや終結を告げようとしていた。

セシドルは、うつ伏せになって倒れている。腹からは血が出ている。

ラルファスは、辛うじて立ってはいるが、よろめいている。

そのラルファスの視線の先には、無傷でたっている青年がいた。

「ふむ、この方が近衛兵長のウイングですか。」

ウイングは、血塗られた真つ黒の魔剣を手に持ち、ゆっくりと歩み寄っていく。

ラルファスは、こちらに気づいたが、力なく倒れていった。

「どうやら終わりのようだな」

ウイングが静かに告げると、

「それは、どうですか？」

とセドリックが言う。

「……貴様、何者だ？ 気配が全くつかめなかったぞ？」

「名乗るほど高貴な者ではありませんが、元フェグティス国の第十二代魔道師団長、セドリック・マツカートニーです」

「セドリック？ 昔、陛下から聞いたことのある名だ。少しはやれ

そうだ。私も名乗るところ。近衛兵長ウイング・ライトニングだ」

「あなたほどの力で近衛兵長ですか？」

「……実際はそれだけではない。俺は、龍騎士だ」

「龍騎士ですか」

「ああ」

そうとなると、最初からラルファスとセシドルが勝てる相手ではなかったということになる。

§

§

龍騎士とは、長大な槍『ランス』を携え、魔獣すら相手にならな
いという、恐るべき跳躍力を誇る騎士のことだ。

しかし龍騎士は、あまりに過酷な修行を積んでもなれる可能性は
低いという伝説の騎士の一つだ。

§

§

だが、ウイングの持つ武器は魔剣であって、ランスではない。

「まあ、私の表の顔が近衛兵長だから、龍騎士として呼ばれることは少ない。しかし、今日だけは、その裏の私を見せてやろう」
そう言った刹那、ウイングの持つ魔剣に変化があった。

魔剣が魔粒子に分解され、再構成される。
次の瞬間には、真っ黒なランスとなっていた。

では、いくぞ……！

超高速で、こちらに走ってきた。

それを、魔剣で受け止める。

魔力同士ぶつかり合うときのスパーク音が鳴り響く。
ウイングの力は強かった。

しかし、肉体強化してなんとか押し返し、体制を整える。

「ははっ！ 私の初撃を受け止めるとは。なかなかやる……ッ！」
「そちらこそ」

敵は、高くジャンプする。

たしか龍騎士の得意分野は空中戦ですね。

ここは、少し様子を見たほうがいいでしょう。

そう思った刹那、ウイングは天井を思い切り蹴って、急降下してきた。

ウイングが一本の矢の如く降ってくる。
スパーク音も聞こえる。

寸でのところでかわしたが、超高熱を持った風が右半身を焼いた。しかし、痛みに呻く暇がない。

着地のときに舞った煙の中から、猛烈な速さで突っ込んでくる。

それを、剣で流し、反撃として剣を振り下ろす。

だが、確かな感触はなく、ただ虚空を切ったのみだった。

残像すらでないほどの速さを持つウイングは、セドリックの後ろに回っていた。

危うく、串刺しにされることを逃れ、蹴り飛ばす。

ウイングの防御が間に合い、威力は半減された。

その間に、間合いを開ける。

ウイングにとって見れば、間合いも範囲外でも関係ないだろうが。

「フェグティス国の魔道師は体を武器にしると教わってきたのか？」

「いや、私はもう魔道師ではないからね。大層な騎士や魔道師の礼儀なんて知らないよ」

セドリックは、その時には動いていた。

剣を、横に薙ぐ。それをランスで防御され、攻撃する。その繰り返しだった。

だが、セドリックにとっては、それだけで良かった。

これまでの人生でここまでやってこれたのは、才能ではなく、どんな凄い一撃でも見抜ける視力だと思っている。

だんだんとウィングのパターンが読めてきた。

そして

敵のランスを右にかわし、リズムを狂わせる。

「ハアッ！」

外力系魔法、戦声。

巨大な振動によって、敵の体制は崩れる。

そして、剣で薙ぎ払う。

ザクリというエグイ音が出る。

しかし、敵は倒れこむことなく、右手を床につけ、側転の要領で体制をなおす。

そんな、バカなッ！

なんで、平然と立っていられるんだ！

心の中の声が表面上に出る。

左腕はザックリ切断されていて、そこから多量の血が出ていた。

「まあ、人間ではありえない話だな。それなら私が人間ではないということならどうだ？」

「人間ではない？」

「それ以上は言えないな」

「たとえ人間ではなくとも、これは受け切れないでしょう」
セドリツクは、右手を上上げる。

光の玉が無数に現れ、集まっていく。そして、それが剣の形になっていく。

五本の剣ができた。

右手を振り下ろす。

そうすると、五本の剣もウイングに向かって放たれた。

光の剣がウイングに殺到する。

爆風を巻き起こした。

煙が巻き起こる。

その先には、見えるはずのない人影があった。

まさか……

それは、驚きの声ではなく、絶望の声だった。

煙が消え、そこにはウイングが立っていた。

この城は、強力な結界が張られているため、魔法による影響は受けない。

そのため、あの爆風でカーペットが燃えることはなかった。

これで、ウイングの正体がわかった。

「あなたの正体、わかりました。絶滅したとばかり思っていました。が、その魔力といい、その生命力といい……すべて魔人の力です。つまり、あなたは魔人ということですよ」

ふっ、とウイングは笑う。

「よくわかったな。そう、私は魔人だ。他にももう一人魔人がいる。この国は、我らがこの生界進出するための拠点となるためのものだから……」

セドリックには、魔人が他に一人いる、ということしか頭になかった。

龍人ですら敵わぬ相手なのか、魔人というのは、絶望感に浸っていた。

「ふむ。フェース国王の真意がわかりました。この世界に魔界の門を開くためですね？」

「そうだ」

「そんなことは、させやしないですよ。私が、なんとしてでも止めて見せます」

「ふっ。無駄な努力を……」

セドリツクは、敵に向かって走る。

敵は、微動だにしない。

敵に切りかかろうとする、その瞬間に敵は消えた。

背中に剣を回し、敵の攻撃を防ぐ。

そのまま、後ろを向き、剣を振り下ろす。

それを、ランスで防御される。

しかし、セドリツクは力で押す。

押し返され、ランスで突かれる。

そのランスを左手で止める。

刃先は左手を貫いてはいるものの、握っただけで抜けない。

それを狙って、セドリツクは魔剣で胸を貫く。

確かな感触がある。

それと同時に、痛みが出てくる。

敵は、啞然とした顔だったが、死んではいない。剣を抜くと敵は後ろに跳躍して間合いを開ける。

「クツ。魔人相手にここまで追い込むとは……だが、忘れてはいないか？ 魔人としての本当の力を私はまだ出していない。魔人のプライドを傷つけた罪は重いぞ！」

その刹那、真っ黒なオーラを放つ。

第四章『畏』（五）

「魔人の魔法を受けられるか？ 絶魔、天嵐てんらん！」
途端に轟音と共に巨大で黒い渦を巻く竜巻がたくさん発生した。

「絶魔は、絶魔で抑えるしかないですね」
左手から血を流して言う。

外力系魔法、絶魔、龍技・風雷ノ舞。
セドリツクの体が黄金に輝き始める。

次の瞬間、何もなかったかのように超自然的に消える。

というよりも超高速移動をしている、と言ったほうが良いだろう。
そして、巨大な竜巻に突っ込む。

「はっはっは、どうした？ 恐怖に煽られて狂ってしまったか？」

その言葉は、セドリツクには届かなかった。

竜巻は、セドリツクをさえぎるようになかなか、進ませてくれない。
体が、鎌で切り裂かれるような感じがした。

そして、ついには完全に勢いをなくしてしまい、体が浮いていった。
上には天井がある。天井に頭をぶつけければ死んでしまうだろう。

竜巻の中で、体を反転翻す。

足が天井につき、思い切り蹴り飛ばす。

また、体に傷がはいる。それを無視して突き進む。

ウオオオオオー！！

柄に合わない声を出す。

声とは不思議なもので、大きな声を発すると自分のリミッターがはずされ、力を最大限に出せるようになる。

いつの間にか、体が軽くなっていた。

「なに？ 竜巻を抜けただと？」

そのまま勢いにのり、ウイングに攻撃する。

咄嗟にランスで守る。

しかし、許容範囲外だったらしく、ランスにひびが入る。ウイングは、後ろに飛ぶ。

セドリックは、すでに疲れており、肩で息をしていた。

もう歳ですね。

最後に一仕事しますか。

「私のランスに傷を……貴様、許さんぞ！」

こちらに走ってくる。ランスは手にしていない。

ということは、肉弾戦ということだ。

だが、こちらもそうしようとは思わない。

ウイングの右手が腹に吸い込まれていく。

それを、左手で受け止める。

血があたりに飛び散る。

勢いは減じず、右足でセドリックの足を払う。

セドリックは、体制を崩す。

その隙を見逃さずに、ウイングは、左手で腹を殴る。

内臓が破裂しそうになったが、内力系魔法、鋼燐で凌ぐ。

しかし、勢いは抑えることができず、瞬くまに竜巻へまた戻ってしまった。

絶望感よりも高揚感の方が強かった。

これは、いつの日か感じた覚えのある感覚だ。

あの日だ。

古龍を倒したときの感覚だ。

あのときの感覚は忘れたことがない。

体に何かが満たされていくような感覚

次の瞬間、セドリックは咆えた。

まさしく、言葉のとおりだった。

ウオオオオオオオオ!

心の叫びが、魔力となる。

偉大な力が破壊を呼ぶ。

そして、覚醒

竜巻は一瞬のうちに掻き消された。
ウィングの驚愕の顔が見えた。

「なぜ、人間がこれほどの力を持っているんだ！」

「私は、龍人です」

「龍人……だと？ あの伝説は真のことなのか！ いや、それよりも魔人ですら倒せぬ古龍を貴様が倒せるはずがない。ましてや、下等な人間などに……」

「魔人というやつは、誰でも自分たちが一番だと思っっているらしいですが、それは間違いですよ。第一、今あなたは私に押されていますからな」

「なに、この私が押されているだと？」

ウィングは、自分が震えていることに気づく。

「あなたの負けです」

そう言い放つと、ウィングは不気味な声を立てて笑い始めた。

「何がおかしいのです？」

「このままでは貴様らが死んでしまう運命にあることを思うと実に笑えてな……」

一瞬の沈黙ができた。

「フェース国の偉大な飛空挺団ジャスティスが、貴様らを殺しに探し回っている。すでに、貴様らは、フェース国のお尋ね者となっているということだ。逃げようとしても、怪我を負っている二人を背負って逃げるのは無理だろ？ それに、私との戦いも残っている。そうなるも貴様らは殺されるということになる」

「それなら、早く決着をつけましょう。自分の負けを認めていないようですから」

「……泣いても知らんぞ？」

ウィングは、動き始めた。

そして、セドリックの後ろに回る。

魔法で構成した新しいランスを手にして、一息で刺す。

しかし、セドリックの残像を消したのみで終わった。

「私も、あなたを殺せるほど力が残っていません。……気絶していてもらいます」

そう言っつて、セドリックは後ろから剣腹で思い切り頭を叩く。

一瞬で力なく倒れこむ。

戦いには勝った。

しかし、生きて帰れるかというのには疑問があった。

だが、セドリックは、その疑問を振り払うかのようにセシドルとラルファスを両肩に乗せ城を後にしたのだった。

第四章『畏』（六）

ラルファスは、何か良い匂いがして『夢』という理想から現実に戻ろうとしていた。

僕、なんで眠ってたんだっけ……？

意識は、戻ってくる。

そうだ、クレアス城でフェース王と面談して、近衛兵たちと戦って、そして……

ラルファスは、すべてを思い出した。

あのとき、近衛兵長のウィングという青年と戦って、負けた。

ということは、ここは牢獄ということか。

だいぶ意識が戻り、眠りから覚めた。

最初はぼんやりと、だんだん視界が広がっていく。が、何かが違う。

牢獄みたいに薄暗いが、景色は違う。

そして、起き上がる。

「ようやく起きましたか」

匂いの方向から聞こえる。

その方向を見なくても、声の主はわかる。

セドリック・マツカートニー。

では、なぜここに彼がいるのか。

答えは一つしかない。

逃げ延びることができた

そして、ここはこの前泊まった宿だった。

「はい」

「もう少し寝ていたほうが良いですよ。あなたさまは、魔力の過労によって倒れたのですから、もう少し休まないと。ご飯ができませんたら起こしますから」

無言で、横になる。

そして、目を瞑る。

が、なかなか寝つけられない。

そういえばさつき『変な夢』を見ていた。

それは、自分でも良くわからない夢だった。というよりも覚えていない。

だれかと話していたのは覚えているのだが。

まあ、いいや。

夢は夢だから。

そう思い、一種の自己暗示で再び眠りに落ちた。

§

§

その眠りから再び起こされた。

「ラルファスさま、ご飯ですよ」

ゆっくり目を開き、起き上がる。

目の前には、おいしそうなスープが置いてあった。
それを飲む。

ああ、温かい。

そう感じるのは束の間。

この場にいるのは、セドリックとラルファスのみだ。

じゃあ、セシドルは？

「セシドルさまなら、あなたさまよりも具合が悪いので、ちがうところに安置しています」

そういえば、そうだったなあ。

セシドルは、腹から血を流していたもんな。

「ラルファスさま。フェース国を早いうちに出なければいけません」
「なぜですか？」

「……気づかないのですか？ あなたさまたちは、フェース王の近衛兵をたくさん殺しているのですよ？ 私たちはすでに、賞金首の一人になっています。そして」

飛空挺団ジャスティスが、私たちの行方を追っています

フェース王は、相当本気らしい。

ジャスティスを送り込むとは……

「それで、セシドルはどうするのですか？」

「セシドルさまは、私が背負って行きます。あなたさまには、魔力を送り込んでおきましたので、大丈夫なはずです」

そのおかげで、体が軽くなったような気がした、ということだ。

「なにかやり残したことはありませんか？」

「ここに未練などありません」

「そうですね……では、セシドルさまを連れてまいります」

セドリックは、となりの部屋に行き、数秒もかからずに背負ってきた。

「では、行きますか」

そう言って、部屋の窓を開ける。

「待つてください。まさか、そこから降りていく、ということではないですよね？」

「いえ、そのまさかです。ラルファスさま、もしかして降りれないのですか？」

「降りたことは何度もありますが、わざわざなんでそこから降りるのですか？」

「あなたさまは存外鈍いですね。私たちは賞金首なんですよ？」

そういえば、そうだった。

「そうですね」

そう言った後に、セドリックはこちらに頷いて降りていった。

この階は、そんなに高くなかった。

肉体強化しなくても降りることができた。

そして、誰にも気づかれぬように走り抜けていったのであった。

§

§

フェースの王都、ロンズを発ち、一時間。ラルファスたちは全く無言で走り続けていた。

もう、逃げ切れただろう。

安堵の念が、はじめて生まれた。

「ラルファスさま、あなたさまに伝えなければいけないことがあります」

セドリックが、話の口火を切る。

「なんですか？」

「ウイングという青年のことです」

「あの近衛兵長がどうしたのですか？」

「ウイングは信じられないほど強かった、そう思いませんでしたか？」

「まあ、はい。自分たちよりは強かったと思いますが……」

「たかが、近衛兵長であんなに強いはずがありません。私も信じられませんでしたが、ウイングの正体は」

「魔人」です。

「え……魔人は絶滅したんじゃない……」

「私も最初はそう思いました。しかし、現実とは違っています。ウイングのほかにも、もう一人、魔人がいるそうです」

「ということは、フェース王は魔人に……」

「使われている、ということになります」

「魔人の目的は？」

「知りません」

「そういえばフェース王がこういつてました。『結界石伝説クリスタルというのがあり、この世に存在する結界石を集め、『空間の塔』と呼ばれる塔の頂上に捧げれば、自分の願いがかなう』そして、フェース王の願いが『完全なる闇』、『完全なる支配』だそうです」

「『空間の塔』……まさか、現実にあるのですか？」

「わかりません。王自身も知らなかったようですし……」

「そうですか。さて、もうそろそろ休むとしますか。どこか隠れられそうなところを探しましょう」

第四章『罽』（七）

隠れられそうなところは、すぐ見つかった。

そこは、ちょうど岩で隠れていて、とてもよい隠れ場だ。

「セシドルの容態はどうですか？」

「ふむ。悪くはなさそうです」

「そうですか」

その後、少ししかない水を少しのみ、また走り始めたのだった。

§

§

一方そのころ、ナーダ国の女王フレイヤは、自分の居城であるフアーカス城の玉座に座っていた。

その目の前には、偵察の魔道師こと、ナーダ国第二魔道師セイルが片膝を突いて、報告していた。

「で、ラルファスたちはフェース王と面談したの？」

「豪奢な金髪を大胆に手ではらう。」

その顔には、面倒くさそうな表情でいっぱいだった。

「はい。しかし、その後フェース王の近衛兵と思われる兵士たちに襲われました」

「もちろんやられた、なんてことはないわよね？」

「はい。ですが、その兵士の長と思われる者と戦い、敗れそうなところを『魔の森』で知り合い、以来ずっと旅をしてきた方に助けられ、その方と一緒に、辛うじて逃げ延びました」

フレイヤは青い瞳を大きくし、ランランと光らせた。

「そいつは、魔法を使えるの？」

「そいつとは、どちらの……」

「鈍くさいわね。どっちもよ」

「近衛兵長と見られる者も、『魔の森』で知り合った方も魔法が使えていました。それも、人間業とは思えぬ強力な魔法を」

「へー。ついにフェース国も魔道師を手に入れたんだ。それで、ラルファスたちは今、どこにいるの？」

「国境付近にいます」

「そう、わかつたわ。じゃあ、カイン。あんたがお迎えに行ったらっしょい。どうせ暇をもてあそんでいるんでしょ？」

壮年の男は、いつも以上に不機嫌そうに答えた。

「俺はそこまで暇じゃない。だが、まあいいだろう。その人間業とは思えないほどの魔法を放てる奴も一緒にいるんだろ？ それなら、俺が行ってやってもいい」

「じゃあ、お願いね」

フレイヤはウィンクする。

カインは、変なものを見た、というような感じで顔をそらす。

逆に、エドは目をキラキラ光らせ、見入っていた。

「じゃあ解散！ …… ちょっと待って。セイルだけはここに残って」
「わかりました」

それと同時に、セイルとフレイヤ二人だけ残してみんな消えた。いきなりフレイヤは立ち上がって、セイルの方に歩み寄ってくる。そして、しゃがんでセイルの耳元でささやいた。

それは、本当に小さな声でセイルにしか聞こえなかった。

そして、セイルも消える。
女王フレイヤは立ち上がり、背伸びをする。

「どうやら戦争は免れそうにないわね。わたしも、もうそろそろ策を考えなきゃね」

そう言い、一瞬で寝室へ戻って横になる。

魔道師と軍隊を合体して魔道軍隊を作ってみるのもいいかも。

フレイヤは、一瞬でひらめいた。

レスターの心と交信する。

反応はすぐ返ってきた。

『陛下、どうしましたか？』

『じい、わたし思いついたんだよね〜』

『なにがです？』

『次のフェース国戦の作戦だよ』

『ほお、それはどんな作戦です？』

『魔道軍隊を作ってみようと思う』

『魔道……軍隊ですか？』

『うん。各隊の指揮権はもちろん魔道師で、わたし直属の魔道軍隊も作ろうと思っているんだ』

『魔道軍隊は良いんですが、陛下直属の魔道軍隊を作る、すなわち陛下直々戦いに来る、ということですか？』

『もちろん』

『それは、困ります。もし陛下の身に、なにか起きたら……』

『じい、三王家の中、いや世界の中でもトップクラスの実力を誇るわたしが死ぬわけないじゃん』

『私は、もしものことを言っているのであって……』

『もう、決めたことだから。あと、魔道軍隊の旗はじいに任せるか』

ら』

『はあ、わかりました。陛下の仰るとおりにします』

『あと、軍隊編成はじいたちでやっという。そして、各魔道師に城が一つずつ当たるように進めておいて』

『わかりました。それでは、今日も残り少なくなってきましたが残りの時間を楽しんでください』

交信を終えたフレイヤは、真っ青な瞳を瞑って、安らかに眠り始めるのであった。

§

§

ラルファスたちがロンズを出て、はじめての町に着いた。

「ラルファスさま、気をつけてください。私たちは、賞金首なのですからね」

「わかっています」

「特に警備兵は、ね。必要ならば殺さなければいけないよ」

「あと旅の最中、私はエヴァンで、ラルファスさまがエルで、セシドルさまがセイン。いいですか？」

「はい」

関所には当たり前だが、警備兵が立っていた。

「そこのお前たち、止まれ。お前たちの名はなんと云う。そのじいさんから順に言え」

「わしは、エヴァンっていうモンじゃ」

「で、僕がエルっていう名前、エヴァンのおじさんの後ろに背負われているのはセイン」

「お前たちの目的は何だ」

「わしらの目的などないよ。ただ、旅をしているだけじゃ。行く当てのない旅だね。もう故郷なんて覚えとらん」

「そうか、それならいいんだ。最近、王都の方で色々騒ぎがあったな。ラルファスとセドルとセドリックという三人組だ。二人は二十歳前後の若者で、一人は六十歳前後だ。そいつらを見つけたら俺に言ってくれ。賞金が、ガツポガポ……いや、なんでもない。いか。見つけたら、俺に言っただぞ」

そう言って、通らしてくれた。

僕たちの名前、もうこんなところまで来ているんだ。
気をつけなきゃ。

第四章『畏』（八）

関所のすぐ近くには掲示板があり、ちょうどそれが目に入った。

ラルファス・セファリード

捕まえた方は、賞金千万ドル、公爵を与える

王は僕たちを捕まえるのに必死なんだ。

ラルファスはようやく気づく。

公爵というのは、五爵のうち最も上の称号である。

「賞金首狩や国家の犬たちが私たちを必死に捕まえようとしているということですか。まあ、そう簡単に私たちは捕まりませんがね」

小声でラルファスにささやきかけてくる。

ラルファスは黙ってうなづく。

少し歩いていくと、町の中心部に出た。

ラルファスたちは、魔法による幻覚を作り、他人からは自分たちの本当の素顔を見えなくした。

町の中心部は、にぎやかだった。

客を呼ぶ声、雑談している声

ラルファスにとっては、どうでもよいことばかりだった。

しかし、この言葉のみは聞き逃せなかった。

『ねえ、聞いた？ ついさつき、フェース王がジャスティスに三人組を探せっていう命令が下されたんだって』

『あ、それ知ってる。たしか、その三人組、千万ドルの賞金がかけられてるんだってね。賞金首狩のやつらが騒いでたよ』

『でも、フェース王も何を考えてるんだか。町を焼き払う気かしら。ジャスティスなんてこの町に来たら、私たち死んじゃうわよ』

『そうよね。でもその三人組、この町には来るはずないわよ』

実際、ここにいるんですけど……

その何気ない会話を聞いて、思わず突っ込みを入れる。

「早いうちに、この町を出しましょう」

セドリックとラルファスは食糧を買い、店から出る。

そのときだった。

「その兄ちゃん、ちょっと面見せてくれるか」

敵つい声が、目の前から聞こえる。

そいつは、スキンヘッドで大きな鉄球を持った体格の良い男だった。

濃厚なさつきが感じられ、おまけに魔力も感じる。

その手には、三枚の紙を持っていた。

すると、いきなり紙を一枚抜き出し、ラルファスの顔と照らし合わせる。

「お前ら、賞金首だな」

「……………」

ラルファスたちは無言で場を流し、通り過ぎていく。

「お前らには悪いがその首、賞金首狩レイス様が頂く！」

そう言い終わると、さつきまで会話を楽しんでいた人たちは『キヤー』なんて言葉を出しながら、ラルファスたちから遠ざかっていく。

「ふうん。君、僕たちの幻術を見破ったんだ」

「あたりめえよ。俺を誰だと思ってるんだ！ この町の賞金首狩ランキング一位だぜ」

「そう。なら、受けてたつよ。セドリックさん、今回は僕に任せておいてください」

「わかりました」

そう言つとセドリックは後ろに下がった。

「じゃあ、いくぜ！」

レイスという男は鉄球を構え、叩きつけてくる。

安定した軌道に乗って、ラルファスに襲い掛かる。

そのまま、ラルファスに直撃する。

砂煙を撒きあげ、男は下品な笑い声を立てる。

「ハッハッハ！ どうだ！ 見たか！ この俺の実力を……」

文末につれ、声が小さくなっていく。

それもそのはず。

つぶれたと思っていた相手が無傷で立っているのだから。

「そう、これが君の実力か。なら、僕のほうが百枚くらい上手だね」手をグツと握り締め、顔を思い切り殴る。

それは、ラルファスの体が霞んで見えるほどのやさだった。

「ぶほうッ」

男はみっともない声を上げ、唾液を撒き散らせながら吹っ飛ぶ。

運良く男が吹っ飛んだ先は店ではなく、コンクリートだった。

無様にも鼻から、タラーと血を流していた。もちろんKOだ。ま

あ、鉄球を離さなかったことは、褒めるに値するだろう。

「全く汚いなあ」

「誰が汚いつて？」

気絶していたはずの男が立ち上がる。

「へえ、これは意外。君、僕の攻撃を食らって気絶してなかったのかい？」

「あつたりめえよ。ふん、このままで終わらしてたまるかってえんだ。俺はな、魔法も使えるんだぜ」

辺りには、既に見物客がたくさんいた。

そのほとんどが、この男と同じように武器を持っていたりするが

……

「よっ！ 町一番の男！」

その一人が言う。

こいつも、賞金首狩の一人か。

鉄球を置き、男は小さな声でささやき始める。

呪文の詠唱だ。

魔法は、特殊なコアが魔粒子を多く分泌すれば詠唱なしで放てる。しかし魔法使いレベルだと詠唱することでコアを興奮させて魔粒子を分泌しなければいけない。

どうやら、この男は魔法使いということだ。

そして、発動する魔法がわからないように詠唱を小さくしているということだ。

どちらにしても、僕には聞こえるんだけどね。

まあ、待つてあげるよ。

一分ぐらいたって、ようやく呪文が完成した。

「外力系魔法、炎龍！」

紅蓮の炎が辺りを焼き始めた。

周りにいた野次馬は「ひいッ」という声を立てて離れる。

「俺の魔法を食らいやがれ！」

すると、体が巨大な火柱に包まれた。

しかし、マジックシールドを瞬時に召喚することで真つ赤な抹殺者はラルファスを焼くことはできなかった。

それを知らずに男は高笑いする。

「どうだ。これが生き地獄つてやつだ。ハッハッハ……」

「ちよつ、レイスさん。焼いてしまったら、殺したと言っても賞金なんてもらえませんよ」

「……へ？」

アホくさい声を漏らす男。

「おい、お前ら。なに見てるんだ！ 早く火を消せ！」

男の焦った声が聞こえる。

この辺で、少し驚かしてやろう。

ラルファスは、いたずら心で炎の中からしゃべった。

「僕は、大丈夫ですよ。焼けてませんよ」

男たちにとって見れば、これはさぞ驚いたことであろう。

死人がしゃべった？ なんてことを思っているに違いない。

もうそろそろ、種明かししますか。

ラルファスは、魔力の振動で瞬時に炎を消し去る。

「残念。僕は死んでませんよ。驚いたでしょう？」

「だ、だれが驚くか！」

そう言っている今も驚いている。

全く、信憑性にかけるなあ。

「まあいいです。さて、僕が『本当の魔法』というのを見せてあげる。魔法の本場、ナーダ国の魔道師の魔法なんて、なかなか見れな

いよ」

「……へ？」

とぼけた言葉を無視し、右手を前に出す。

「外力系魔法、雷光」

その右手の手のひらから金色の電撃が放たれる。

かなり手加減した電撃は男の右手に直撃。

男は、声なきうめき声を発する。

口をあけ、悶え苦しみ、倒れこんだ。

まあ、この男が悪いんだ。

罪悪感の全くないラルファスだった。

そもそも無謀だったのだ。魔道師に挑むなど。

「セドリックさん、行きましょう」

そう言い放ち、歩き始める。

が

「ま、待ってくれ」

男がラルファスを止める。

ラルファスは止まる。

別に聞き流して通り過ぎていくことも可能だったのだが。

「まだ、なにかあるの？」

「おおありだ。俺のプライドにかけて俺は負けたままでは終わらせられない。それでも不敗だったんだからな。この身が滅びるまで、俺はお前に挑み続ける」

男は、よろめいてはいたものの立ち上がる。

「そういうのを『無謀』っていうんだよ」

「それでも俺は戦う！」

炭化した右手で鉄球を持つ。

そして、それを振り回す。

最初に比べれば勢いがなかったが、炭化した手で戦ってるとは思えなかった。

そのガッツに敬意をこめて剣を抜く。

その剣で、男の鉄球を受け止める。

男は、なお攻撃を繰り返す。

ラルファスは胸をそらしてそれをかわし、男のあいた首に剣を突きつける。

「君の負けだ」

「まだだ……」

この期に及んでも、男は攻撃しようとしてくる。

今のこの男は賞金首狩としてではなく漢おとこだった。

殺すか殺されるか、どちらかになるまで男は攻撃してくるだろう。

仕方がない、気絶させるか。

男の腹めがけて、思い切り膝を入れる。

そのときに、唾が垂れたような気がするが気にしない。

崩れ落ちるところを、ラルファスは手で支えて、ゆっくりおろした。

「レイスさんッ！」

そう言っただけの男たちが走ってきたが、ラルファスは目で睨みをきかす。

男たちは、威圧感に押され止る。

早速、ラルファスは男の右腕に手をかざす。

魔粒子が光の粒になり、男の右腕に集まってくる。

そして、一瞬の閃光を発する。

次の瞬間には、手は元通りに治っていた。

自分の出来栄を見て、ラルファスは立ち上がり「行きましょう」

とセドリックに言う。

「そうですね」と言い、歩き始める。

あの男、またいつか会うような気がする

そんな思いを抱きながら、歩き始める。

しかし、また誰かに止められる。

「その君たち、待ちなさい」

この声聞いたことがある。

関所の警備兵の声だ。

ラルファスとセドリックは、お互いに見合っつてうなずき合い、走る。

警備兵は、追いつくはずもない。

後ろを見ると、すでに息切れした警備兵の姿があった。

「失敗しましたね。あの男と戦ったせいで目立ってしまいました」

「そうですね。今度の町も気をつけなければなりませんね、セドリックさん」

「そちらの方は大丈夫だと思っておりますが、ジャステイスがこの情報を聞いて、こちらに向かってくるでしょう。そうならば、今までのようにはいかなくなってしまう、追われながらナーダ国の国境を越えなければいけないかもしれません。それだけは、避けたいですね」「そうですね」

南のほうへ向かって走って行くのであった。

§

§

一方そのころ、フェース王のいる城、クレアス城の王室では……

「陛下、お許してください。見つかりませんでした」

謎の男が、片膝を突いて言う。

「そうか。しかし、そんなに離れてはいないだろう。一日で移動できる範囲は限られている。明日も探してくれ」

「ははっ！」

突然、ドアのノックオンが聞こえた。

「誰だ？」

「近衛兵長、ウィングでございます」

「入れ」

ウィングは、ドアを開けて一礼して入ってきた。

そして、謎の男の隣に片膝をついて言う。

「陛下におかれましては今日もご機嫌麗しくて何よりでございます」
「うむ」

「あの三人組を逃がしてしまい真にすみませんでした。私の未熟さ故に逃がしてしまいました。どうか、お許してください」

「うむ、それだけか？」

「いえ、三人組の情報が入ってまいりました」

「伝えよ」

「ははっ。三人組は、つい先ほどウォールの町にいたそうです。そこで町一番の賞金首狩と戦い、警備兵が駆けつけたところには戦いは終わっていたそうです。そして、その警備兵は追いかけたらしいのですが、南のほうへ走って行ってしまったそうです」

「そうか。思ったよりも遠くに逃げたんだな。よし明日は国境の砦に向かえ」

「ははっ」

謎の男が答える。

「よし、もう下がってよい」

二人とも静かに返答し、「では」と言って出ていった。

一人残されたフェース王は口を吊り上げて、笑っていた。

「最後の結界石が手に入るのに時間は、残り少しか」

王室全体に声が響いたのだった。

第六章『ジャステイス、侵攻す』（一）

翌日、寝る間を惜しんでずっと走り続けた結果、国境線にある砦が薄っすらと見え始めてきた。

このまま進めばあと一時間程度で国境を越えられる、といったところだ。

昨夜は結局、ジャステイスに追いかけられなかった。

僕たちが、あの町にいたことは知られてしまったんだ。

今日あたり国境線を超えるとということくらいは、わかっているはずだ。

ラルファスは、そう結論付けた。

昨夜は一日中走ったのだが、あまり疲れてはいない。

食料もすっかり持ってきているからだ。

食料と水さえあれば、一か月くらいは走り続けられると思う。これは大げさかもしれないが。

順調に走っている。

予定通り一時間で着いた。

しかし、国境を越えるには砦を通らなければいけない。

昨日の町みたいに幻術を使うという手もあるが、それは賢いとはいえない。

なぜなら、砦に魔法使いがいる可能性があるからだ。

次に考えたのは、強行突破だ。

これもあまり賢い手だとは思えない。

ジャステイスに、国境線を越えましたよ、というファンファーレを鳴らすのと等しい行為だからだ。

しかし、これ以外考え付かない。

「セドリツクさん、なにかいい策は考え付きましたか？」

「ふむ。私が考えた策は……」

その策はいい！

というわけでセドリツクの作戦で国境線を越えることにしたのである。

と、いきなりブウウウウンというプロペラ音みたいな音が聞こえてきた。

この場でプロペラ音というと、考え付く先はただ一つ。

飛空挺団ジャスティス

王都ロンスの方を見ると、空に黒い集団があった。

カラスとも考えられるが、普通に考えてジャスティスと見た方が
良いだろう。

いや、子供に聞いてもわかる。

「私たちにはその作戦を実行するだけの時間がないと言っことですか。どちらにせよ、強行突破しかないようですね」

「そうみたいです」

そついい終わると、セドリツクの体が光り始める。

突然、眼前で大爆発が起こる。

爆風と振動がここまで到達する。

セドリツクの魔法だ。

煙が晴れて、目の前にはくつきりと穴が開いていた。

それは、隕石が降り注いできたかのような感じの穴だった。

「兵士たちがやってくる前に早く行きましょう」

そう言って、さきほどよりも断然速いスピードで駆け抜ける。

しかし、その大爆発もジャステイスからも見えたわけで、ジャステイスは方向転換しこちらに向かってきた。

ラルファスは砦の瓦礫を踏みながら、横目で砦の中を見た。兵士たちが、大慌ての様子だった。

「あ、あいつら、三人組だ」

一人の兵士が言くと、ほかの兵士もつられて見る。

「ほ、本当だ。よし、奴らを追撃せよ！」

前者の声は驚きの混じった声だったが、後者の声は鶏が鳴いたような声で笑えた。

砦を通り過ぎると、後ろのほうで大地を振動するような音が聞こえた。

振り向いてみると、大きな筒から火花が散っていた。

これを大砲というのだが、この当時はどこの国も使っていないく、新兵器と呼ばれるもののひとつというのは、後々知ることとなる。

その大きな音が聞こえたと思えば、地面に大きな穴があき、土砂があちりへ飛び散った。

おまけにその、穴のあいたところには火がついていた。

魔法かな？

と一瞬思ったが、確実に違った。

その砦の後ろからは、黒い集団が見え始めていた。

ここは見晴らしの良い平原で、隠れられそうなくところかひとつも

ない。

つまり、逃げ延びるしかないということだ。

確か、ここから直線距離で昼夜問わずずっと走り続ければ、三日で王都に着くはずだ。

それをセドリックに伝える。

「案内してくれますか」

セドリックは、そう答えた。

ラルファスは、南東に方向を変える。

また、大きな音が鳴る。

今度は、ラルファスたちの目の前に穴が開いた。

そのせいで、土砂がラルファスたちを襲う。

痛くはないのだが……

それ以降は、もう大きな音はならなかった。

しかし、ジャステイスはだんだんと近づいてきている。

セドリックの魔力が高まった。

「なにをしてるのです？」

「いえ、少しばかり進行の邪魔をしているのです」

後ろを振り向くと、たしかにさきほどより遠くなっている。

「少しは時間稼ぎになるでしょう」

「どういう魔法を使ってるのですか？」

「簡単な魔法です。風属性の魔法ですよ」

「そうですか」

プロペラ音は、だんだんと消えていった。

それ以後何もしゃべらず、逃亡生活二日目終了

この日は、セドリックが風属性の魔法を使っていたおかげで、ジャステイスとの差を離すことができた。

夜は何も見えないため、きつと僕たちを見失っただろう。

これがラルファスの率直な意見だ。

だが、走りは止めない。

視覚が全く意味がない状態で走り続けること五時間。

だいぶ夜も明けてきた。

薄暗い中、目を凝らして見ると黒い集団が薄っすらと見えた。

あきらめの悪いやつらだな。

まあ、そういうやつは嫌いじゃないけど。

それよりも、お腹がすいた。

今日が正念場だ。

第六章『ジャステイス、侵攻す』（二）

「なかなか、しぶといですな」

セドリックは咳払いのように言う。

「それにしても、腹が減りましたね。向こうさんも同じ条件ですが」

まあ、逃げ延びる自信はあるけどな。

セドリックの言葉に心の中で付け足す。

「セドリックさん、セシドルの容態はどうですか？」

「背負っているのであまりわかりませんが、気持ちよさそうに眠ってますよ」

「そうですね」

またもや沈黙。

しかし、静寂さはなかった。

ジャステイスのプロペラ音が、かすかに聞こえる。

いや、大きくなってきている。

「セドリックさん……」

「ふむ、どうやら向こうさんも追い上げてきましたね。こちらも速めに行きましょう」

しかし、走りを速くしても一向に遠ざからない。

逆に近づいてきている。

「おかしいですな。風属性の魔法で妨害しているのですが」

セドリックは、首を傾げて言う。

後ろを見れば、ジャステイスはどんどん近づいてきている。

そして、弓矢を放てる範囲内に入ってしまう。

『射てー！』

遠くから風で消えそうな声が聞こえる。

そのとたん、小さな風切り音が聞こえ始めた。

それは弓矢が飛んでいく音であり、それがラルファスたちに殺到する。

しかし、それをかわすのは、ラルファスたちにとって赤子の手をひねるも同然である。

耳で音を聞き分けることで、簡単にかわしてやる。

そのお返しに、手のひら台の電気の玉を作り、それを後ろに投げる。

その電気玉は十万アンペアを超える電流で雷を小さくしたバージョンみたいなものだ。もちろん、当たれば死ぬどころか丸焦げになってしまう。

その電気玉は、風に左右されることなく真っ直ぐ一機の飛空艇に向かっていった。

それは飛空艇の船体に当たる。

破壊音が辺り一帯に鳴り響いた。

一瞬にして、飛空艇は大破する。

「ラルファスさまは外見に似合わず、大胆にやりますね」

「まあ、一応借りは返しておきたかったです」

弓矢の雨は降り止んだ。

電気玉と劣るにとらない轟音が鳴り響く。

音からして、昨日のあの変な兵器だ。

しかし、当たることはない。

というよりも狙いが定まっていけないので、かわさなくても大丈夫なのだ。

間をいれずに次の音が鳴り響く。

これも当たらない。

どこか遠くの方で土砂が飛び散っていた。

次の音が鳴り響く。

その途端に目の前の土砂が飛び散った。いつものラルファスならかわすこともできたのだろう。いや、現に昨日はできていた。

だが、この日のラルファスは精細を欠けていた。

目の前の穴に対処できなく躓いてしまう。

そして、無残にも転んでしまう。

隣で走っていたセドリックは、ラルファスが穴に引っかかったのを知って急に走りを止めるが、足元が滑ってバランスを崩す。

動いていなかったら、弓矢の格好の餌食だ。

そう思ったラルファスは、すぐ起き上がる。

が、弓矢がラルファスを狙っている。

腰の剣を引き抜き、弓矢から守ろうとした。

ほとんどの弓矢は薙ぎ払うことができたのだが、一本の矢だけ守りきれず肩に刺さる。

痛みをこらえ、第二派が来る前に立ち上がり逃げる。

セドリックは、魔法ですべての弓矢の勢いを止めていた。

弓矢が力なく落ちるのを見届け、ラルファスの方へ向き直り、走り始める。

走る最中、セドリックは聞いてきた。

「大丈夫ですか？」

「そんなに大丈夫に見えるでしょうか？」

「……見えませんね」

セドリックだって、わかっているだろう。ラルファスの肩から血が出てるのを。

「手当てしなくても大丈夫なのですか？」

「大丈夫ですよ」

実際ラルファスはわかっている。大丈夫そうには見えないだろう、

と。

しかし、そんなんでセドリックさんに手間をかけさせたくない、
という気持ちからこんな言葉が出たのだ。

「そうですか」

セドリックは心配そうに言った。

ラルファスは、走りながら意識がぼんやりしてきていることを感
じていた。

また、轟音が鳴り響き始めた。

§

§

カインは、平野を走っていた。

その平野は、ナーダ国とフェース国を結ぶ一番早い道だ。

というわけで、カインはこの平野を走っている。

昨日、フレイヤに命ぜられてすぐにファーカス城を出て、これま
でノンストップで走っている。

そして、今日が二日目というわけである。

感じるぞ……強大な力を……

カインは、着実にラルファスたちに近づいているということがわ
かっていた。

というよりも、ラルファスたちの魔力が感じられる場所は目と鼻
の先なのだ。

プロペラ音と何かが爆発している音も聞こえる。

プロペラ音は一度だけしか聞いたことがないのだがわかる。
飛空艇

しかし、もう一方の爆発音は全くわからない。

戦ってるのか？

その可能性も考えたのだが、ないと思う。

内力系魔法で視力を上げる。

そこには、必死で逃げる二人の姿があった。

一人はわかる。

ラルファスだ。

もう一人は……セシドルではなく、五十代らへんのおじさんだっ
た。

こいつがセイルの言っていた、強い魔力の持ち主か。
確かに感じる。

ラルファスと同じような魔力で不思議な感じがする。

よく見ると、ラルファスの肩から血が出ている。

弓矢みたいなものが刺さっている。

あの馬鹿……死ぬ気か？

また爆発音がとどろく。

ラルファスたちの周りで小さな爆発が起きた。

正体はあれか。

魔法ではなそうだが……

その考えに浸ることなく、走りを含んでの十倍速にして駆け抜け

ていった。

§

§

ラルファスはすでにノックアウト状態だった。意識がぼやけていて、今にも倒れそうだった。ジャステイスの狙いも定まってきたおり、間一髪でよけられたものもいくつもあった。

今まで頑張つて走り続けてきた。

しかし今回ばかりは、もう無理だった。

穴があるわけでもないが、転ぶ。

セドリックは、先ほど同様、急に走りを止める。

だが、急に止まった反動のせい、すぐには動けそうになかった。

意識は、なんとかある。

しかし、立ち上がることができない。

仰向けになって動けないでいた。

『射てー！』

そんな声が聞こえたような気がした。

弓矢が放たれ、ラルファスに殺到する。

終わった……

ラルファスは、自分の死を悟った。

第六章 『ジャスティス、侵攻す』 (二) (後書き)

ご感想・ご意見・各種批評・間違いの御指摘などをお待ちしております。

第六章『ジャスティス、侵攻す』（三）

突如、目の前に黒い影が通り過ぎていった。

それは、なんとなく見たことがあるような気がした。

ラルファスには、すべての時が止まったような気がした。

迫りくる弓矢が止まる。

そして、それら全てが粉々になる。

それだけを見届けるのが最後で、ラルファスは永遠ともいえよう深さの闇に吸い込まれていったのだった。

§

§

全身黒づくめの男がラルファスの前に立っていた。

その男は、平然とたっており、魔力で構成された細い糸を魔力で操っていた。

「あなたは、誰です？」

セドリックは、弓矢を剣ではじきながら聞く。

「俺は、ナーダ国第六魔道師カインだ。陛下の勅命のより、ラルファスを迎えに来た」

カインは、そう言いながらラルファスを担ぎ、走り始める。

その速さは物凄く、かつては『風』とたとえられたセドリックですら、感嘆した。

セドリックは遅れをとらぬよう、カインの後を追う。

弓矢はようやく止み、その代わり爆発音が大地を振動させる。

だが、さきほどより速くなったセドリックたちには当たるわけも

ない。

そう悟ったのか、三、四回攻撃したあと、もう爆発音は鳴らなかった。

カインは、さらに加速する。

セドリックも、加速する。

しだいにプロペラ音は聞こえなくなり、やがては静寂に包まれる。後ろを振り向くと、ついさっきまであった黒い集団は遠い彼方にあった。

夕時頃、セドリックたちはついに、ナーダ国王都ザワールについた。

もう夕方というのに、まだ賑わっていた。

そのザワールの中心には堂々と聳え建つ城、クレアス城が見える。歩くこと一時間、クレアス城の前にやってきた。

そこには門番があり、疲れているせいか、うとうと眠っていた。

が、セドリックたちの不可視の圧力を感じ、門番は慌てて起きる。

「……はっ！ カイン様。御無事で」

顔パスで門を開けてくれた。

第六章『ジャスティス、侵攻す』（四）

セドリックたちがファーカーカス城に入ると、兵士たちが寄ってきた。

「カイン様！ 御無事で……」

すると、カインは手で制する。

「俺のことなど、どうでもいい。それより、こいつらの容態を見てくれ」

カインは、ラルファスを下ろす。

セドリックも、それに続けてセシドルを下ろす。

「……ラ、ラルファス様とセシドル様ッ！ 大変だー。すぐ衛生兵を呼べーッ！」

兵士は、大慌てで叫ぶ。

そう時間がかからないうちに、白い格好をした衛生兵が来た。

ラルファスとセシドルを担架にのせて、運んでいった。

「そう言えば、お前の名前を聞いてなかった」

「私は、セドリック・マツカートニーと申すものです」

カインの顔が一瞬、驚嘆の顔になった。

が、すぐに元の表情に戻す。

「そうか。陛下が王室で待ってる。お前も、一緒に来い」
そう言いおえると、背中を向け歩き始めた。

一階、二階、三階と階段を上る。

カインは、さらに階段を上った。

この階には、上る階段がなかった。

この階が最上階らしい。

カインは、馬車二台が並んでも収まるような幅の廊下を歩く。足を踏みしめるたびに、セドリックたちとは違う魔力が強くなっていく。

一番奥まで歩くこと、十分。
ようやく、カインは止まった。

コンコン。

ドアをノックする。

「カインね。入っていいわ」

澄み通ったソプラノの声の中から聞こえる。

カインは、ドアを開け部屋に入る。

セドリックも続けざまに入る。

当たり前だが、その部屋は広がった。

その中央にある玉座には、世界の男たちを魅了するほどの美貌を持つ女性が座っている。美貌に欠点など見当たらない。

この絶世の美女というのが言葉で表すには最も適している。しかし、その美貌には似合わないほどの魔力を備えている。

その鋭利な碧眼は、こちらの心を見透かすようにランランと光っており、隙が見当たらない。王者たる器を備えていた。

かつては最強と呼ばれたセドリックも、この女性を前にして初めて未熟さを味わった。

もし戦うとすれば、互角……に戦えればよいほうだ。

この女性こそがナーダ国女王フレイヤ・レイド・ナーダだと瞬時にわかった。

その女性を前にして、カインはブスツとした表情で突っ立っていた。

普通は、片膝をつくのが常識である。

セドリックは、元魔道師団長だけあって、礼儀はわきまえている。

セドリックは、片膝をつく。

「カイン、そちらの方は？」

ソプラノが部屋に響く。

「こちらは、セドリック・マツカートニーだ。ラルファスとセシドルと共にジャステイスから逃げていた」

「そう。ところでセドリック殿、あなたの経歴を教えてくださいませんか？」

セドリックは、自分がフエグティス国の第五十二代魔道師団長を務めていたこと、古龍を倒したことなど、自分のしてきたことをすべて話した。

すべて話し終わるまでに三十分はかかった。

その間フレイヤは、楽しそうにその話を聞いていた。

「セドリック殿、あなたはもうしぶんの無い経歴を持つてるわね。」

……単刀直入に言うわ」

フレイヤの顔が紅潮していた。

ナーダ国の魔道師にならない？

セドリックは、したたか驚いた。

しかし断る理由など、どこにもない。

まだ私には、やるべきことがあるようですね。

「わかりました。私を使っていただけだと仰られているんですね？喜んで、務めさせていただきます」

「じゃあ、儀式をしましょう」

女王は、その言葉に続けて言う

セドリック・マツカートニー、汝をナーダ国の魔道師として任命する。今日よりナーダ国第九魔道師として、我を支え、国を支え、仕事に励まれよ

「ははッ！ 我が身滅びようとも、陛下を、国をお守りいたします」
こうしてセドリックは、正式にナーダ国第九魔道師となったのだ
った。

突然、目の前に片膝をついた壮年の男が現れた。

「陛下、報告で御座います。北方のほうより、フェース国の飛空挺団ジャステイスと思われる黒い集団が、このザワールに向かって進んでおります」

「ご苦労さん、セイル。で、今はどの辺りにいるの？」

「ザワールまで、あと一日でつくところにいます」

「そう。じゃあ、ラルファスとセシドル以外の魔道師を総動員させて、迎え撃つこと。わかった？」

「はい」

セイルは、ただでさえ頭が低いのに、さらに頭を低くする。

「じゃあ、ラルファスとセシドル以外の魔道師全員集合させてちょうだい」

「ははッ」

その刹那、セイルは言葉のとおり消失した。

第六章 『ジャスティス、侵攻す』 (五)

その十分後、ナーダ国の屈強な魔道師たちはフレイヤの玉座の前に集まった。

「さて、皆集まったわね」

フレイヤはいきなり立ち上がり、セドリックの近くに歩み寄る。

「みんな、こちらは本日からナーダの魔道師として仕官することになったセドリック・マッカートニー。彼の経歴は……」

フレイヤは、さらに続ける。

さきほど、セドリックが話したことほぼ同じ内容を話す。

「……というわけです。どう？ 申し分ないでしょ？ ナーダ国に相応しいわ」

フレイヤは首をかわいらしく傾げて言う。

そして、魔道師たちは一人ずつ自己紹介をする。

カインの短い自己紹介が終わって、すぐしわがれた声が響く。

「陛下……わしらを集めた理由はこれだけなんですか？」

最年長者レスターだ。

「いいや、違うわよ。ここからが本題」

フレイヤのさきほどまでの笑顔は消えていた。

周りの魔道師たちも真剣な表情になる。

『フェース国の飛空挺団ジャスティスが、我が国の領土に侵入している。そして、どうやらそいつらは、ザワールを目的地としているらしい。それも翌朝には到着する位置に今いる』

「それならこの俺様が破壊してやるよッ！」

カーヴァンが熱り立って言う。

鉄球を手にしていて、今にも叩き潰されそうな感じがする。

「カーヴァン、今回は許すわ。でも、念のため現在使える魔道師七

人を総動員させておく。OK?」

その直後、かわいらしい声が女王に向かって発せられた。

その声の主は召喚師ミウだった。

「陛下、なぜ七人なのですか？ 魔道師は九人いるはずですが……」
ミウが言いたいことは要するに、なぜラルファスとセシドルがこのメンバーに入っていないのか、ということだ。

ほかの魔道師たちも思っていたらしく、みんな頷いていた。

「そう、本来は九人。でも、今はラルファスとセシドルが怪我を負っていて戦えそうにないから。でも、一週間たったら治る……」と思う。要するに、二人は怪我をしていて使い物にならないということよ」

ミウをはじめ、ほか四人の魔道師も納得したようだ。

「わかりました」

かわいらしい声が少ししぼんだような気がした。

「で、迎撃する場所はザールより少し離れた場所、つまり民に迷惑にならない場所よ」

フレイヤは豪華な髪をかきあげる。

「じゃあ、明日の午前一時にここに集合。睡眠はたっぷりつけておけ。いいわね?」

だれも答えない。

「無言は了承ということ。じゃあ、解散!」

フレイヤの言葉と同時にセドリック以外の魔道師は消えた。

フレイヤも、奥にある寝室に入ろうとする。

そこをセドリックがとめた。

その理由は簡単。

「陛下……私の部屋はどこでしょうか……?」

「え……あ、そうね。今日は一先ずラルファスの部屋で我慢して
そう言っつてフレイヤは目にも留まらぬ勢いで走って消えた。

いや、ラルファスの部屋と言われましても……

セドリックにわかるはずもなかった。

その日、探すのも面倒くさかったので、王室の前で寝ることにしたのだった。

§

§

翌日の午前十二時四十五分。

エドは、王室に入ろうとした。
だが

目の前には得体の知れない何かがあつて入れなかった。
気配があるので人間ということにはわかったのだが。

エドは、手のひらを上に向ける。

その瞬間、手のひらから光の玉が出てきた。

これは、とても優しい光だった。

しかし、その光でも廊下を照らすことは可能だった。

そして、目の前にいる謎の物体もわかった。

セドリック・マツカートニー。

たしか彼の名前は、こうだった。

……？
まったく、魔道師入り早々から、よくこんなところで寝てられるな。
まさか、フレイヤちゃんの寝室を覗こうとしてるんじゃないよな

エドは、半ばその考えを本気にしていた。
ぶん殴ってやるうか？

そう思ったほどだ。

しかし、そんなはずがあるわけないな、と冷静に考え肩をたたいて起こそうとする。

その瞬間だった。

セドリックの体が急にブレ、エドの目にも視認不可能なほどの速さで剣に手をかけた。

そして、気がついたらセドリックの魔剣はエドの首まで紙一枚のところまで止まっていた。

エドは、単に驚愕した。

この俺が剣筋が見えなかったって……？

今にも、魔剣が首をはねそうだった。

だが、セドリックは剣をおろす。

「すみません。どうも昔の癖のようで、考えるよりも先に手が出てしまうのです。……エドさん、本当にすみません」

セドリックは、鞘に剣を収め、謝る。

まあ、悪気がないって言うのはわかってるんだけどよ……
なんか変な間があったのが気になる……

「いや、大丈夫。……それより、もうそろそろ時間になるぞ」

セドリックは、『はッ?』という顔をしていた。

だが、次の瞬間すべてを思い出したようで「あ、そうですね」と言っただけで王室の中に入っていった。

王室には、フレイヤ以外誰もいなかった。

「やっぱり、エドが一番早いようね」

「当たり前じゃない、フレイヤちゃんが待ってるんだから、ねえ?」

セドリックは、何も用意していなかったので対応に困った。

まあ、率直な気持ちはこうだろう。

「ねえ、と聞かれましてもお答え致し兼ねますよ」

「そうかい。ところで、セドリックさんは好きな女性っているわけ？」

セドリックは、思わず噴出しそうになった。

だが、そこは堪えて、冷静を装った。

「私ですか？ 私は、もう年ですよ。昔なら確かにいたのですが…

…」

そんな話が十五分間、ずっとされたのだった。

第六章 『ジャステイス、侵攻す』 (六)

「やれやれ……みんな集まったから始めるよ」

フレイヤがそう言うのと、さきほどまでセドリックにしつこく好きな人を聞いていたエドが、いきなり真面目になった。

エドさんの好きな人は、やはり……？

セドリックは感づく。

しかし、第四魔道師のミウという線もある。

セドリックはしょうもないことを考えていた。

「セドリック、なにポーっとしてるの？」

「いえ……私はポーっとしていませんが」

「そう。それならいいや」

そう言っつて、話を始めた。

フレイヤは延々と話していた。

「……というわけで主に戦うのはカーヴァン、アンタよ」

瞬間、誰かの魔力が上昇した。

その魔力はほかでもない、カーヴァンだ。

カーヴァンは『戦闘狂』『破壊の魔道師』などと戦闘に関する異名を多く持つ。

それほど血の気の多い魔道師なのだ。

「陛下、恩にきりませぬ！」

カーヴァンは子供のようにはしゃぐ。

鉄球を子供のおもちゃのように振り回しているのを見れば幼年学校に入学したての子供でもわかる。

ちなみに幼年学校というのは数え年六歳の子供が入学できる学校で、入学してから六年在学することになる。

「はいはい、わかったから……鉄球を振り回すことだけはやめてね」
フレイヤは、まるで子供を相手にしているかのように宥める。

しかし、カーヴァンは聞く耳を持たない。

「カーヴァン！ いい加減にきなさいよ。アンタだけ待機してもらおうよ！」

フレイヤは、魔力を一気に放出する。

相手を威圧するためだ。

その魔力を感じ取ったカーヴァンはたちまち動けなくなった。

いや、もしかすると『待機してもらおう』という言葉に反応したのかもしれない。

「それでよろしい。じゃあ、行きますか」

フレイヤの一声で魔道師は消えた。

実際には超高速移動をした、というのが正しい。

だが、消えるが一番表現するのにふさわしいだろう。

一人残ったフレイヤも一秒遅れて消えた。

§

§

指定された場所……ザワールから少し離れた場所に魔道師たち、
そしてフレイヤはいた。

そこは、どんなに戦っても王都にはなにも被害が加わらない場所だ。

じきにプロペラ音がなるだろう。

それがフェース国の飛空挺団ジャステイスの到着を表し、それと同時に戦いの合図にもなる。

フレイヤには見える。飛空挺団ジャステイスがこちらに向かっていくところを。

しかし、何かがおかしい。

飛空挺ごときにあれほどのスピードが出るのか。

ましてや大量生産型の飛空挺に……

他の魔道師たちにはこんな芸当はできないだろう。月光という微々たる光だけで見るということなんて。

フレイヤは魔道師として最大の才能を持って生まれてきた。だからこそできる芸当。

もちろん例外はいるが。

その例外が昨日、ナーダ国の魔道師となった。

この上ない喜びを感じた。

後の戦いには、必要な戦力となる……とフレイヤは考える。

推測だが、セドリックもジャステイスは見えているだろう。

小さくプロペラ音が聞こえ始めた。

それは常人には注意深く聞いても聞こえない音だ。

それを聞き取れるのだから、魔道師、または魔法使いは異常なのだろう。

フレイヤにしては、変なことを考えていた。

雲が月を覆う。

魔道師たちの魔力が緊張し始めてきた。
臨戦態勢に入ったということであらわしている。

だんだん音は大きくなっていく。

そして、気づいたときには目の前に大きな影がたくさん集まっていた。

雲間から月光がそそぐ。

先頭の飛空艇の船首に黒衣の男が現れた。

その男は黒いマントを身にまとい、風になびく。
まさに全身黒づくめだ。

「私はフェース国の飛空艇団ジャステイス団長ヴァン。我々はフェース国の使者としてナーダ国に来た！ ナーダ国女王と面会させていただきたい！」

「私がフレイヤ・レイド・ナーダだ。なるほど……あなたたちの用件はわかりました」

フレイヤの声音が低くなる。

「しかし、あなたたちは我らの魔道師を攻撃した。……単刀直入で言おう。断る。それでも話したいというのなら、武力で語ろうではないか！」

フレイヤの張り詰めた声は魔力をまとっていた。

フレイヤはまさしく女王らしい態度だった。

するとヴァンは、ふははははは……という不気味な声をたてて笑った。

「実に血の気の多い女王だ。いいだろう。少しはお前たちに身の程を教えてやるさ……」

冷静な声で言う。

冷静すぎて気味が悪くなるほどだった。

「カーヴァン、やっていいわよ」

フレイヤはカーヴァンに言う。

「言われなくてもやるぜ！」

それを言う前からやる気だったらしい。

カーヴァンは鉄球を地面に置く。

「奈落の底へ消え去れッ！」

カーヴァンは地面に手をつける。

そのとたん、手が光りだす。

外力系魔法、光陣。セシドルの聖拳・円陣の元となった魔法だ。

轟音とともに一筋の強烈な光が目前の飛空艇すべてを飲み込む。

その光はザワールの南のほうからでも見えただろう。

目を閉じていても眩んでしまった。

やがて視力は戻る。

その目の前には大破した飛空艇の姿があった。

かつての飛空艇の面影は残しておらず、何も知らないで見た人は、

これが飛空艇だなんてわかるはずがない。

当然のように消失した。

ただひとつを除いて……

上空にポツンと残された影があった。

「どうした？ ナーダ国の魔道師であろう者が俺に傷一つつける」とさえてできないか？」

黒衣の男が上空で無傷で浮いていた。

びくともしない。

変わったところが唯一あるとすれば、漆黒の翼が背中から生えていることくらいだ。

一同全員が唖然としていた。

「魔人ですね……」

隣のセドリックが言う。

「そう。魔人だ」

「しかし、それなのになぜ魔力が感じ取れなかったんでしょうね」

「これのおかげだな」

魔人ヴァンは服の内ポケットから、水色に光るものを出した・

「それは……それは、水の結界石^{クリスタル}」

レスターが言う。

流石は年長者ね。

フレイヤは変なところで感心する。

「そう。この結界石^{クリスタル}は、所持者の力を外に漏らさない、という性質がある。魔力やプレッシャー、エクシードみたいな力をな」

エクシード……？

フレイヤには聞いたことのない言葉だ。

「まあ、最後のエクシードはお前らには使えないがな。魔人特有の能力だからな。……それよりもお前」

ヴァンはカーヴァンを指差す。

「俺の部下たちを殺した罪は重いぞ？」

不穏な空気が流れる。

「お前こそ奈落の底へ落ちて言ったらどうだ？」

瞬間、ヴァンは消失した。

いや、そう見えただけだ。

ヴァンは高速移動でカーヴァンの目の前まで移動し、固く握りつぶした拳をカーヴァンの腹に打ち付けた。

そうした一連の行動をフレイヤは目で追うことができた。

しかし、反応が遅れた。

速すぎる……

しかし、当のカーヴァンは右手で拳を止めていた。

「なかなかの反応速度だ。これだけでも褒めるに値するぞ」

「そりゃあどうも……」

ヴァンは体をいったん引く。

休む暇もなく、ヴァンは回し蹴りをする。

それには反応できなかったカーヴァンは、顔面にモロ食らってしまった。

「カーヴァン！」

高くすみ通った声が響き渡る。

そして、助けようと体が勝手に動く。

その瞬間、ヴァンはこちらを見た。

不可視の力で体が動けなくなった。

いや、拘束された。

「お前は黙っている。これは一対一の戦いだぞ」

この不可視の力は、こう語っているようだった。

回し蹴りをモロに食らったカーヴァンはそれで終わらず、地面においてあった鉄球を手を持つ。

そして、柔道の前回り受身の要領で体制を整える。

鉄球をヴァンの肩にたたきつける。

魔力が凝縮された魔法武器である。

その鉄球がヴァンにあたるまで、そう時間を要さなかった。

ヴァンは無反応だった。

鉄球がヴァンにあたると、爆発が起きた。

もちろんカーヴァンがしたことだ。

そして、カーヴァンがしたことなので加減がされているはずがない。

煙であたりが見えない。

たとえ魔人だからといって、それをモロに食らってただで済むはずがない。

少なくともフレイヤは、そう信じていた。

だが、現実はそう甘くない。

カーヴァンの苦しそうな声が聞こえたのだ。

煙がやがて薄くなる。

そこには、カーヴァンの首を片手で持ち上げているヴァンの姿があった。

助けようとする。

しかし、拘束されていてできない。

そんな自分に腹がたった。

と、そのとき隣に黄色い光を通ったのを見た。

そして、それとほぼ同時にフレイヤの豪華な髪がフワリとあがった。

ヴァンの周りに、また煙が出る。

煙が晴れたころには、ヴァンとセドリックは自分たちの剣を交えていた。

§

§

セドリックは、カーヴァンが苦しむ姿を見た。

本能的に助けようと手が動いた。

不可視の力で自分を拘束しようとしている。

しかし、龍人である今の自分にはさして効果はない。

右手から、電撃が発せられた。

外力系魔法、雷剣。

雷属性の中位魔法。

実際には剣のような形ではない。

しかし貫通力と速度に長けているため雷剣という名前なのだ。

それはさておき、雷剣を放ったセドリックは、すぐさま愛剣ホー

リージャツジメントを片手に持ち、走る。

白い軌跡を闇に残す。

その先には、もちろんヴァンがいる。

雷剣がヴァンに直撃。

セドリックは、これくらいで魔人が死なないことを知っている。

だから、ヴァンに切りかかる。

対してヴァンは、それを自分の魔剣で受け止める。

黒いオーラと白いオーラが重なり合う。

バチバチバチッ

魔剣のぶつかり合うスパーク音が鳴り響く。

「流石はウィングを倒しただけはある。まあ、あいつは下位魔人だから弱いかな……残念ながら俺は上位魔人だから簡単にことは進められないぞ」

「あなたは戦い中によく喋る人ですね」

「ふん。大口たたけるのも今のうちだ」

煙が晴れる。

二人はパツと離れる。

そして、二人はまたくっ付きあう。

今度は、セドリックが押される。
セドリックは、被害を最小限に抑えるべく超自然的に後方に飛びのく。

派手に吹っ飛ばされたのはこのためである。
上空で数回転して着地。

ヴァンは、すでに間合いを詰めてきている。

驚異的なスピードだ。

セドリックは舌を巻いていた。

セドリックは地を這うような位置から魔剣を振り上げようとした。

ヴァンはそれを鮮やかに止める。

しかし、セドリックは振り上げた。

ヴァンは体制を崩す。

セドリックは手を返し、剣先の進む方向を転じさせた。

ヴァンは、器用に剣の軌跡を変えて受けきった。

セドリックは横殴りの斬撃を送り込む。

剣先のスピードは既に肉眼では見える速さではない。

魔剣の放つオーラのみを残す。

受けきるしかない斬撃のはずだった。

だが、目の前のこれは 残像ですか！？

手応えのないところを見ると、そうらしい。

気づいたときには遅く、ヴァンの像はふっと揺らぎ、跡形もなく消える。

セドリックはその場から飛びすたり、まるで降って湧いたように右手から叩きつけられた斬撃から逃れる。

きわどい所で魔剣の軌跡が走る。

双方、相手を捕らえぬまま、間合いを取る。

そして、ヴァンの足元から土塊が飛ぶ。

二人の体が重なる。

魔剣同士が反発する音とともに、五合、十合と打ち合う。

それからまた間合いを取り、互いに平行に走る。

ヴァンが叫ぶ。

「人間にしては、なかなかやる。だが、相手が悪かったな」

セドリックは、その言葉を無視する。

ヴァンは大きく踏み込み、魔剣が黒い閃光となって叩きつけられる。

綺麗な弧を描いたその剣撃をセドリックはギリギリで避けた。

首筋に赤い筋が入る。

そして、休むことなくヴァンは攻撃してくる。

ヴァンの体が一瞬で巨大化を遂げる。

さらに、ヴァンの背後には、ざあつと残像が連なっていく。

次の瞬間、大上段から繰り出される強烈な一撃が頭上に来た。

本能に身を任せ、迎え撃ち、弾き返す。

ヴァンの剣先が変わった。

その速度をほとんど減じることなく、セドリックの脇腹を斬撃が襲う。

それを辛くも受けきる。

そしてなお攻撃は止まない。

このままでは、負けるどころか死んでしまうかもしれませんね。

それだけは、嫌ですよ。

龍人の血が騒ぐ。

龍人特有の能力 覚醒。

能力が極限までに上がる。

そのかわり、持続時間は少ない。

切り結ぶ力を弱め、突如として身を引く。

流石のヴァンも意表を突かれ、僅かによるめいた。

外力系魔法、絶魔、龍技・風雷ノ舞。

セドリツク最大の魔法。

未だかつて、これを受けてひれ伏さなかった者はいなかった。覚醒と絶技の掛け合わせた技。

普通の人間では、越えることのできない力。

セドリツクの体が黄金一色のオーラに包まれた。

一撃必殺の斬撃がヴァンを襲う。

たとえ魔剣で受けきろうとしても、薄っぺらい木と同じく、真っ二つになってしまっただろう。

かといって、避けることもできない。

セドリツクは勝利を確信した。

そのままホーリージャツジメントは、ヴァンに吸い込まれていく。ヴァンは、無反応だった。

そして、セドリツクの予想通りヴァンは真っ二つになる。

血が傷口から大地を真っ赤に染めようか、というくらい噴出して
いる。

内臓もあちらこちらに散らばったりもしている。

……これが驕り高き者の末路ですよ。

心のうちで呟いた。

しかし、体ではわかっている。

まだ、ヴァンは生きています……

その証拠に不可視の力がまだセドリツクを拘束しようとしている。そして、気づいときにはヴァンの死体は消えていた。

まさか……幻術なのか？

いつもの口調とは違った。

それは驚愕だったからだろう。

「どうだ？ 驚いただろう？ 上位魔人がこれくらいで死ぬわけがない」

セドリックの頭上にいた。

「だが、これだけやり合える人間がいたとはな。この世界に来てから、初めて緊張感の持てた戦いができた。まあ、俺の域までは程遠いがな」

とても腹ただしい口調である。

「せいぜい精進するがいい。そして、俺の域に近づいて来い」

そう言うと、ヴァンは闇に溶けて消えていった。

高速移動ではなく、消えていったのだ。

これもヴァンの能力ということですか。

面白い。

必ずや、あなたたちの野望を止めて見せましょう。

セドリックは誓った。

第一部『ジャステイス、侵攻す』エピソード

地平線から薄っすら朱色の光が漏れ出し始める。

ついさきほどまで、ザワールのはずれにある 場所でフレイヤたちは戦っていた。

厳密に言えば、カーヴァンとセドリックだけだが。

それも、カーヴァンは赤子の手をひねるも同様に、コテンパンにやられていた。

あのヴァンという魔人を追い払ったのはセドリックがいたからこそだ。

フレイヤなど動けずにいた。

そして今はファークラス城のフレイヤ専用の寝室で寝転がっている。

わたしは、一体何ができた？

自分に問いかける。

出てくる言葉はただ一つだ。

ただ呆然とセドリックとヴァンの戦いを見ていた。

つまりは、何もできなかった。

わたしの力では足りないということかしら？

魔人

はるか昔に滅びたはずの古龍という反則的な力を持っている生物を除けば、最強の生物だった。

しかし、実際には滅びていなかった。

セドリックの報告の中で、フェース王が言っていた『完全なる闇』の意味がなんとなくわかった。

魔界の門を開くということだ。
そのために結界石クリスタルを集めているということなのか？

突然、声が聞こえた。

実際の声ではない。

無音だ。

『陛下、そろそろ起床なされますようお願いします。我々は王室で陛下を待つておりますから』

『ねえ、じい。わたしって弱いのかしら？』

『……陛下、いきなりどうなされましたか？』

『ヴァンとの戦いがあったでしょ？ あのと時わたし、体が束縛されているかのような感じがして動けなかった。でも、セドリックは動いていた。だから……』

『あの方は古龍を倒した龍人でございます。外見よりもずっと年齢を詰まれています。龍人の能力の一つに不老不死がありますから。ですから陛下よりも経験を積まれているのです』

『それはわかってるよ。でも……』

『陛下が早く立ち直らなければ、この国は滅びますぞ！』

フレイヤは心にグツと来た。

確かにそうだ。

しかし、今の自分ではこの国を守ることができるのか？

『……御無礼、お許してください。しかし、この国の現状はこれなのです』

『……』

沈黙が続いた。

フレイヤは迷っていた。

これからさき、どうすればよいのかを。

しかし、これだけはわかる。

何もしなければ、それだけで全てが終わることだ。

どちらにせよ、わたしの選択肢は一つしかないじゃん。

『じい、わかったよ。今行くよ』

無音会話はこれで終わった。

「フレイヤは起き上がる。

寝巻きではなかったため、着替えない。

そのまま、王室に行く。

王室とフレイヤ専用の寝室は隣りあわせだ。

そのため、すぐ行くことができる。

ドアノブに手をかけて、そのままあける。

そこには、九人全員の顔があった。

ラルファスは肩に包帯を、セシドルは腹に包帯を巻いていた。

見るから具合悪そうだ。

しかし、二人はフレイヤの前に出てきて片膝をつく。

「陛下、すぐお会いできなく、まことにすみませんでした。お許しください」

セシドルが言う。

「……お許しくださいって言われても、アンタたち怪我してたんだから仕方ないじゃん」

フレイヤは、なんとかいつもの素振りを装っている。

「それよりも、怪我は大丈夫なの？」

怪我人に聞く言葉ではないことくらいフレイヤはわかっている。

しかし、フレイヤは一国の主だ。

部下の心配をしないではいけない。

「はい。私たちは、すっかりとは言えませんが戦いに出られるようにはなっております」

ラルファスが答える。

「それは良かった」

言葉とは裏腹に、嘘つけ！ と思っていたが口には出さない。本人が大丈夫といつているのだから、大丈夫なのだろう。

「それより、なんで皆集まってるの？」

「……………」

変な沈黙ができた。

口火を切ったのは、レスターだ。

「これから起こるであろう戦いの作戦について話し合うためですが……………」

セイルがその後続ける。

「フェース国は既に軍隊の編成を終わらせており、出陣するまで時間は要さないかと思われます」

これを聞いてフレイヤは思い出した。

「そう。わかったわ。……………そういえば、じい。魔道軍隊の編成は終わった？」

「まあ、一応……………軍団を作るための兵が足りませんので……………」

「うん。じゃあ、すでにできている軍隊を解散して編成していいよ」

「それでは、今までの將軍のほうか怒るかと思ひます」

「それなら、將軍を魔道師の補佐官にすればいいんじゃないかな？」

「……………やってみます」

レスターとフレイヤが勝手に会話を広げていた。

ほかの八人は全く話の内容が読めていない。

「あの、恐れながら陛下。私には全くわからないのですが……………」

いつもと同じく、かわいらしい声が発せられた。

ミウだ。

ほかの者も頷いている。

「そうね。あなたたちには、なにも教えてないものね。じゃあ、説明するわ。えーと、軍隊編成の方法として、魔道軍団というのがあるのよ。これは、名前のとおり魔道師がその軍隊の総指揮官、つま

りは將軍となつて兵を率いるの。

これのメリットは、戦局を判断して兵を操つたり、魔法を放つたりできて、鉄壁の軍団になるところね。それに対して、デメリットは、一人行動ができないところ。だから、強力な魔道師が現れたら、それについていけないというわけ。まあ、こういうときは補佐官に指揮権を預ければいいけどね」

「まあ、いいんじゃないか」

カインが、珍しく口を開く。

「別に陛下の命なんて興味はないし、この国の未来にも興味はないからな。それに陛下を殺そうなんてこと、考えたって誰もそれを成功できないだろうからな」

ひどい言い様だ。

昨日聞いていたら、もしかしたら納得できたかもしれない。

しかし、今は自信を失っている。

ヴァンみたいなのが来たら、ひとたまりもない。

「……まあ、そうね。じゃあ賛成ということでもいいかしら？」

無言、無言。

「無言は賛成と判断。じゃあ、編成のほうは後ほど。解散……」
覇気がなかった。

しかし、それに気づいたものはいない。

いつせいに消えた。

と思いきや、一人だけ残っていた。

セドリック・マツカートニー。

古龍を倒した天賦の才能を持つ男。

そして、ヴァンと互角の戦いを繰り広げた男。

人間だから、という理由で手加減していたかもしれないが……

しかし、フレイヤは動けなかった。

実力の差を感じてしまう。

その男が残っていた。

「陛下、どうしましたか？」

セドリックは聞いてきた。

どちらかというところ、こっちが言いたいくらいだ。何も言っていないのに残ったのだから。

「え？」

わざととぼけた。

「いえ、陛下に覇気がなかったたので……」

この男はよく見ているらしい。

話してしまおう。

そう思った。

「……セドリック、わたしはお前から見たら弱いのか？」

「そんなことは、ありません。龍人の力を持った私でさえ、初めてお目にかかったときは身震いするほど強力な魔力を感じましたからそれは事実かもしれない。」

しかし、動けなかった、という事実もまた存在する。

「しかし、わたしはヴァンと戦おうとした瞬間、魔力とは何か違う変な力で拘束されてしまい、動けなかった。セドリック、お前もその力は感じてたでしょ？」

セドリックは、困った表情をしていた。

なぜ、困った表情をしているのかはわからない。

「……感じてました。あれは、ヴァンも言っていたエクシードと呼ばれる力です」

そういえば、そんな言葉言っていたような気がする。

「ヴァンは、魔人特有の能力と言っていました。それは違います。現に私も一応使えますし、私の師も使えます。強いて言えば、古龍だって使えます。そのエクシードという力は意志が強い者ほど発揮されます。意志が強いからこそ、自分の限界を超えることができるのです。まあ、限界を超える以外にも使えますが……」。

たとえば、陛下も感じたかと思っていた、拘束するということです。これは魔力でもできませんが、魔力の場合は威圧感で相手を拘束します。そのため、相手の魔力を上回れば拘束される力は弱まります。

エクシードは、意志が強い者ほど発揮されると言いましたね。魔力のときと同じように、堅い意志を持っていれば拘束力は弱まります。私はこのことを知っていたので、動けたのです」

「じゃあ、わたしも使えるのか？」

「はい。誰でも修行を積み使えます。……しかし、エクシードは限界を超えるための力です。生半可な修行では習得できません」

「そうか……ありがとう。少しは自信を取り戻せたよ」

「そうですか。それは何よりのことです」

セドリックは笑顔だった。

それは天使のような笑顔で、フレイヤは癒された。

「では、私はこれにて……」

そう言って、消えた。

第一部『ジャスティス、侵攻す』エピローグ（後書き）

これで、第一部完ということになります。

プロローグを新しく作り直したので、そちらも見ていただければうれしいです。

内容わかってしまっているので、面白くないかもしれませんが。

第二部『魔道師VS軍隊(仮)』プロローグ

ラルファスの前に茶色いショートヘアの青年が立っていた。その青年から放出されている魔力は尋常ではなく、あのセドリックを凌ぐほどである。

ラルファスは、驚きを隠せない。

魔力がセドリックを凌いでいるからではない。

目の前の青年がラルファスと瓜二つだからだ。

顔立ち、体型、どれも細部までラルファスと同じだ。

しかし、それは表面上のことだけだ。

青年の深紅の瞳は、寂しく陰っている。

それは、なにか大切なものを失ったようにも見えた。

視線がぶつかる。

「あなたは……誰ですか？」

ラルファスが口を開く。

青年はじつとこちらを見つめたままで、こつ答えた。

「俺が誰かなんて、どうでもいい。ただ、お前を試しにきただけだ」
ぶすりと言う。

僕を試すだって？

意味がわからなかった。

その心情の戸惑いが表面上に出ているらしい。

「意味がわからないのは、仕方ない。だが……一つだけ試したいことがあってな」

そう言つと、青年はゆっくりと剣を抜く。

ブウウウウン

聞きなれた羽音が耳に入る。この後の戦いを予感させた。

その魔剣のオーラは白銀だった。

セドリツクの魔剣よりも、強い輝きだった。

もし、その魔剣を青年が作ったと言うならば、おそらくこの青年は超一流の魔道師だろう。

では、いくぞ

声を放ち、青年は魔剣とともに駆けてきた。

白銀の軌跡と残像が青年を追う。

そして、一瞬でラルファスの間合いに突入。

かと思えば、いきなり地面を蹴り上げる。

空中に浮いた青年は、体をひねる。

そうすることで、体は自然と回転し、その力の分だけ破壊力が上がる。

ラルファスの目は、その一連の動作をとらえることができなかつた。

気づいたときには、目の前に浮いた青年がいた。

その顔は無表情だ。

慌てて防ごうとし、剣を抜く。

バチバチバチッ

魔剣同士の反発しあうスパーク音が聞こえる。

ラルファスはわけもわからず、剣を抜くと本能的に防いだのである。

そして、ラルファスの持つ剣、それは普通の剣ではなく、青年と同じ白銀のオーラを放つ魔剣だった。

驚きに驚きが重なる。

しかし、そんな思いに耽っている場合ではない。

頭上から、十トンの岩が落ちてきたかのような衝撃が体中に走る。ラルファスの足が地面にめり込んでる。

青年は、その反動で再び空中に舞う。

ラルファスは青年の落下地点を予測し、走る。

いくらなんでも、鳥ならぬ人間は落下地点を選べるはずがない。そう考えた。

そして、着地する一点のみ、どうしても動きが限定され、完全な防御は望めない。

自分でも驚くほど無駄がなく、強烈な一撃を繰り出す。しかし

現実には、そう甘くなかった。

ラルファスの剣は、青年の剣腹でガードされ、そして弾かれた。ラルファスはよろめく。

青年は追い討ちをかけるように、攻撃してくる。

その攻撃は、当たれば致命傷になる。

ラルファスはそれを、後方へ飛びのいてかわす。

間一髪のところをかわし、二、三回、くるくる回転して着地。

そう瞬間、ラルファスの眼前は青く輝く魔力の球体がいくつも迫っていた。

それを、瞬時にマジックシールドを召喚して、防ぐ。

が、マジックシールドは万能なわけではない。限界があるのだ。まさしく、これが限界だった。

マジックシールドが崩壊し、いくつもの球体がラルファスに殺到する。

ラルファスは本能に任せ、剣腹でガードする。

その刹那、両腕に重い衝撃が走り、煙が生じる。

それと同時に首筋に冷たい気配がした。

煙が晴れなくてもわかる。
負けたと。

やがて、煙が晴れる。

白銀のオーラを纏った魔剣は、ラルファスの耳元で羽音を立てている。

「今日の非礼は、すまないと思う」

青年はそう言って、魔剣をぱちんと鞘に収める。

「試しがいがあった。お前は……」

そう言って、青年ははつとして顔になる。

「いや、今はやめておこう。いつかはわかることだ。自分で確かめたほうがいい」

青年はそう言って、立ち去ろうとする。

『お前は……』の続きの言葉が気になる。

しかし、それをあえて言わなかったのは理由があるからだろう。

『待つて』

ラルファスは無意識に声を出し、青年の肩にてをかける。

青年は止まる。

「なんだ？」

ぶすりと言う。

「あなたの……名前は？」

その瞬間青年は、ふっと笑った。

この青年らしくなかった。

「名前などに、意味はない」
言い切った。

そして、ラルファスの手を振り払う。

しかし、あきらめない。

「じゃあ、その非礼のお詫びだろ思って、教えて……」

しばしの間、沈黙が宿る。

ラルファスは、言ってから後悔した。

だが、もう遅い。時間はとりもどせない。

そして

「仕方ない。俺の名はクラウドだ」

その瞬間、意識がぼやける。

そのぼやけた意識の中、ラルファスは見届ける。

クラウドの立ち去る姿を。

そして、完全に意識が寸断される。

が、それと同時に、また別の意識が戻る。

ラルファスは白い天井を見ていた。

さっきのは夢……？

それとも、こっちが夢……？

どちらかはわからない。

しかし、さっきのが夢だとラルファスはわかる。

あれは、リアルな夢ではあった。

だが、それ以下でもそれ以上でもない。

第一にラルファスは魔剣など持っていない。

だが、心の中に一種の高揚感があった。

熱い。

しばしの間、頭の中を整理させてから、ラルファスは起き上がり、カーテンを開ける。

陽光が差し込む。

そして、ラルファスは今日もがんばるのだった。

第一章『新たな戦友』（一）

カインはファーカス城の庭で不機嫌そうに立っていた。今日はラルファスを待っているのだ。約束の時間はとうに過ぎていく。そろそろ堪忍袋の緒が切れそうだ。

あいつ、一度半殺しにしようか？

最初は薄っすらと、そして今はその考えが脳内の八割を占めている。

チャンスを与えてやる……

あと一分だ。

一、二、三……

カインは目を瞑って心の中で数える。

五十七、五十八、五十九……

残り一秒のところで、ラルファスはひょっこり出てきた。

その顔は憎たらしいほどに笑顔だ。

それもそのはず。

今日はラルファスが以前から『教えてほしい』と懇願されていた、魔力で構成された武器の作り方をカイン直々に教えるのだ。

まあ、一日で習得できるような簡単な技術ではないが……それにしてもラルファスは運のいいやつだ。

あと一秒遅ければ、八つ裂きにされていただろう。

カインはやると決めたことは実行する男なのだから。

「カインさん、おはようございます」

元気な声だ。

調子が悪そうではないようだ。

「お前、約束の時間から二十九分五十九秒遅れてるぞ」

カインは不機嫌そうに言う。

だが……

「すみません。僕、寝坊しちゃったんです」

能天気と言う。

こいつ……やはり半殺しにしようか？

カインは、それをなんとか飲み込む。

「ふん。まあ、いい。今日やることはわかるな？」

「はい！」

ラルファスの明るい声が響く。

「ならいい。まず、最初に簡単な方法を教える」

カインは、刀を抜く。

それは以前戦ったときのような魔法武器ではなく、魔力のオーラをおびていない普通の刀だった。

そしてカインは実演してみせる。

これは簡単だ。

ただこの刀に魔力を注入するだけなのだから。

刀に手をかざす。

その手には真っ赤な魔光が集まってくる。

その手を刀身に滑らせる。

そうすると、手を滑らせた刀身は次第に真っ赤に染まっていく。

ほんの十数秒でおわった。

それだけで、その刀は赤いオーラを纏った。

ラルファスの顔はキョトンとしていた。

簡単だ、と思ったに違いないだろう。

「カインさん、これで終わりですか？」

「ああ。簡単なやり方はこれで終わりだ。方法は……」

カインの言葉が遮られた。

「あ、わかりますよ。刀に魔力を注入したのでしょうか？ でも刀身までは魔力は及んでいないということは、つまり表面だけに魔力を注入するんですね？」

カインは背筋がゾツとした。

俺の実演を一回見ただけで方法がわかっただと？

こいつ恐ろしいほどの素質があるな。

「カイン……さん？」

ラルファスは不審そうにカインの顔をまじまじと見る。

「いや、なんでもない。お前の言ったとおりだ。やってみろ」
そう言って、カインは新しい刀を渡す。

ラルファスは、さきほどのカインと同様に刀に手をかざす。

だんだん、蒼い魔光が手に集まってくる。

そして、その手を刀身に滑らせる。

十数秒後には、ラルファスの手に収まっている刀は蒼いオーラを放つ魔剣……いや魔刀となっていた。

これで初めてやったというのか……？

ラルファスのチャージする手つきは相当手慣れていた。

だが次の瞬間、ラルファスの持つ魔刀のオーラが消える。

一瞬にして普通の剣に戻る。

「この方法は簡単ではあるが、チャージした者の魔力が続く限りしかその効力はない。そして、お前の言ったとおり刀身まで魔力は及ばない。だからその分、切れ味は悪くなる。次に教えるのは、魔力で構成した魔法武器の作り方だ」

カインがそう言った瞬間、ラルファスの目は輝きを増した。待っていましたと言わんばかりだった。

「これは、まず武器を魔力で構成する技術がないといけない。お前、できるか？」

「できません」

「そうか。なら、俺の実演を見てろ」

カインは目を瞑って、集中する。

頭に作りたいもののイメージをする。

それを魔光で形どる。

そして、頭の中で物質を配分する。

魔力の密度によって物質は変わる。

密度は物質ごとに違う。

それと同じように魔力で構成する物質も密度ごとに違う。

その性質を使った。

それにより、刀身部分はアダマタイトと呼ばれる現存する物質の中でもっとも硬い物質にする。

そして次の瞬間、閃光が閃く。

その瞬間、手が重く感じた。

成功した。

そう思い、目を開ける。

確かに、手は刀を握っていた。

ここまでかかった時間は三分くらいだ。

ラルファスは啞然とした表情だ。

やはり、この原理はわからなかったか。

カインは思った。

お知らせ

こんにちは。kumegonnです。

今回はお知らせがありまして投稿させていただきました。

前から考えていた小説のプロットが完成しました、

なので、それをこちらのほうに載せましたので見ていただければ、
と思っております。

クラウド ～伝説の傭兵～

<http://ncode.syosetu.com/n6125m/>

そして、この小説はサブ小説ということになり、『クラウド ～伝説の傭兵～』こちらのほうをメイン小説にします。

ですから、この小説の更新頻度は遅くなります。

この小説をメイン小説にしてほしい、という方が大勢いるのであれば考えますが。

私の勝手ですみません。

第一章『新たな戦友』（二）

「……………」
ラルファスは未だに啞然としている。
逝っちゃった様な顔だ。

「……………大丈夫か？」
カインのその一声でやっと我に帰る。

「あ、ああ、はい。大丈夫です。もちろん、このやり方も教えてくれるんですよね？」

それは疑問ではなく、確認するような口調だった。
「ああ。では、教えるぞ。一回だけしか教えないからな」

カインはそう言っつて、手取り足取りして指導する。
そうして、出来上がった最初の刀は形がボロボロで原型がわからない状態だった。

「……………」
「……………」

二人の間に静寂が宿った。
その視線の間には、処女作品がある。

「……………ん？」
ラルファスが首お傾げる。

「どこか、間違いがあったのかな？」
「……………こればかりは、努力しないとできない技術だ。まあ、頑張れ。俺はもう帰るぞ」

「え？」
「これができないと次に進めないから、俺の出番はない」
「……………待ってくださいよ」
ラルファスの手がカインの肩に触れる。
「見守ってくれてもいいじゃないですか」

全く面倒くさいガキだ。

カインは内心つぶやいた。

「仕方ない。わかった」

そう言った瞬間、ラルファスは満面の笑みになった。

そして、仕方なく一日中ラルファスに付き合うこととなったのである。

しかし、一日中練習しても真っ直ぐに伸びる刀はできなかった。

どうしても、刃がガタガタになっていたり、曲がっていたりするのだ。

カインも飽きてきたので、やめないかと言ってみるが、なかなかやめてくれない。

どうやら、出来上がるまで見てろ、ということをお願いしたいのだろう。

カインはひらめいた。

なぜ、ラルファスの刀がちゃんとした刀にならないのかを。

その理由は

「ラルファス。お前、剣を作ってみたらどうだ？」

そう、その理由は自分が馴染めていない、もしくはあまり関わっていない物を作ろうとしていたためだ。

「あ、はい」

そう言って、集中する。

庭が再び静寂を取り戻す。

十分後、閃光が走る。

目を開けると、そこにはラルファスの持っている剣と、なんら変わらぬ剣があった。

ラルファスの顔が最初は不思議そうな表情、次第に紅潮していた。

「や、やったあ！」

無邪気な子供と同じように喜ぶ。

剣を手にしながら喜んでいる姿は物騒極まりなかった。

「よし、第二段階は終わった。今日はもう遅いから、第二段階は明日教える」

「わかりました」

まだ、興奮が残っているせいか、ラルファスの顔は赤かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4156k/>

龍の宿命

2010年10月10日10時29分発行